

藤村詩抄

島崎藤村自選

島崎藤村

青空文庫

自序

若菜集、一葉舟、夏草、落梅集の四巻をまとめて
合本の詩集をつくりし時に

遂に、新しき詩歌の時は來りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばり、いづれも明光

と新聲と空想とに酔へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗の言葉を飾れり。

傳説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帶びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壯大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口脣にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀

と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの聲に和しぬ。

詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦闘の告白なる。

なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に勵まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か舊き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじゝ新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月

日を過しぬ。

藝術はわが願ひなり。されどわれは藝術を軽く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

明治卅七年の夏

藤村

抄本を出すにつきて

二十五六といふ青年時代が二度と自分の生涯には來ないやうに、最初の詩集も自分には二冊とは無いものだ。その意味から、曾て私はこれらの詩を作つた當時のことを原本の詩集のはじめに書きつけて置いたこともある。

明治二十九年の秋、私は仙臺へ行つた。あの東北の古い靜かな都會で私は一年ばかりを送つた。私の生涯はそこへ行つて初めて夜が明けたやうな氣がした。私は仙臺名影町の宿舍で書いた詩稿を毎月東京へ送つて、その以前から友人同志で出してゐた雜誌

『文學界』に載せた。それを一冊に集めて、『若菜集』として公にしたのが、私の最初の詩集だ。私の文學生涯に取つての處女作とも言ふべきものであつた。その頃の詩の世界は非常に狭い自由なもので、自分等の思ふやうな詩はまだく遠い先の方に待つてゐるやうな氣がしたが、兎も角も先蹤を離れよう、詩といふものをもつとく自分等の心に近づけようと試みた。黙し勝ちな私の口脣はほどけて來た。

心の宿の宮城野よ

亂れて熱き吾身には

日影も薄く草枯れて

荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は

吹く北風を琴と聴き

悲しみ深き吾眼には

色無き石も花と見き

(草枕)

私が一生の曙はこんな風にして開けて來た。

明治三十一年の春には私は東京の方に歸つてゐて、第二の集を出した。それは『一葉舟』とした詩文集で、その中には『若菜集』

以後仙臺で書いた『鷺の歌』の外に、東京に歸つてからの詩數篇をも納めたものである。同じ年の夏、郷里の木曾へ旅して、福島にある姉の家で『夏草』を書いた。私の第三の詩集だ。

私が信州小諸へ行つてあの山の上の町に落ちつくやうになつたのは、翌三十二年のことであつた。そこで私はまた詩作をはじめて、第四の詩集をつくつた。『落梅集』はその全部が千曲川の旅情ともいふべきものである。

私の青春の形見ともいふべき四卷の詩集は、明治二十九年より三十三年へかけ前後五年に亙つて、それ／＼別冊として公にしたものであつたが、三十七年の夏に『一葉舟』や『落梅集』から散文の部を省いて、合本一卷とした。私の詩集として世に流布し

てゐるものがそれである。

さういふ私は今、岩波書店の主人から普及叢書の一冊として、この詩集の抄本をつくることを求められた。思ふに、原本の詩集を縮め、僅かの省略を行ひ、たゞ形を變へるといふだけのことならば、抄本をつくることもさう骨は折れまい。しかしそれでは意味はすくない。長い月日の間には原本の詩集も幾度かの編み直しと改刷とを経たものであるが、更に私は編み方を變へて、此の抄本をつくることにした。尤も、詩集としての内容にさう變りのあらう筈もないが、編み方に意を用ひたなら、抄本は抄本として意味あるものとならうかと思ふ。

これを編むにつけても、もつと私は厳しく選むべきであつたか

とも考へる。今になつて見ると『若菜集』の中に、仙臺時代以前に書いた二三の古い詩を見つける。『君と遊ばむ』『流星』などがそれで、さういふものは省いたらとも考へたが、自分の出發の支度はそんなところにあつたことを思ひ、未熟なものも一概にそれを省き去る氣になれなかつた。原本の詩集のうち、一番多くを省いたのは『夏草』の中からで、『若菜集』や『落梅集』からも長短數篇を省いた。題目等もこの抄本にはいくらか改めて置いたものもある。すべてはこれらの詩を書いた當時の自分の心持に近づけることを主にした。

思へば私が『若菜集』を出したのは、今から三十一年の前にもあたる。この古い落葉のやうな詩が今日まで讀まれて來たといふ

ことすら、私には意外である。頭髮既に白い私がこれを編むのは、自分の青年時代を編むやうなものである。この抄本をつくるにつけても、今昔の感が深い。

昭和二年五月

麻布飯倉にて

著者

若菜集より

明治二十九年——同三十年

(仙臺にて)

序のうた

こゝろな
心無き歌のしらべは

ひとふさ
一房の葡萄のごとし

なさけある手にも摘まれて

あたゝかき酒となるらむ

葡萄棚ふかくかゝれる

むらさき

紫のそれにあらねど

こゝろある人のなさけに

蔭に置く房の三つ四つ

そは歌の若きゆゑなり

味ひも色も浅くて

おほかたは噛みて捨つべき

うたゝ寝の夢のそらごと

草枕

夕波くらく啼く千鳥

われは千鳥にあらねども

心の羽はねをうちふりて

さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に

なぐさめもなくなげきわび

胸の氷のむすぼれて

とけて涙となりにつけり

蘆葉あしはを洗ふ白波の

流れて巖いはを出づること

思ひあまりて草枕

まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の

なきなぐさめを尋ね侘び

道なき森に分け入りて

などなき道をもとむらむ

われもそれかやうれひかや

野末に山に谷たにかげ蔭に

見るよしもなき朝夕の

光もなくて秋暮れぬ

想もおもひ薄く身も暗く

残れる秋の花を見て

行くへもしらず流れ行く

水に涙の落つるかな

身を朝あさぐも雲にたとふれば

ゆふべの雲の雨となり

身を夕ゆふあめ雨にたとふれば

あしたの雨の風となる

されば落葉おちばと身をなして

風に吹かれてひるがへ飄り

朝あさの黄雲きぐもにともなはれ

夜よる白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ亂れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿やどの宮城野よ

亂れて熱き吾身には

日影も薄く草枯れて

荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は

吹く北風を琴と聴き

悲み深き吾目には

色彩いろなき石も花と見き

あゝ孤獨ひとりみの悲痛かなしさを

味ひ知れる人ならで

誰にかたらむ冬の日の

かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば

空冬そらふゆぐも雲に覆はれて

身にふりかゝる玉たま霰あられ

袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風つよ勁く

小川の水の薄氷

氷のしたに音おとするは

流れて海に行く水か

啼はいて羽風かぜもたのもしく

雲に隠るゝかさゝぎよ

光もうすき寒さむぞら空の

汝なれも荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の

光もなくて暮れ行けば

人めも草も枯れはてゝ

ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔うて行く人の

踏めばくづるゝ霜柱

なにを酔ひ泣く忍び音ねに

聲もあはれのその歌は

うれしや物の音を弾ねひひきて

野末をかよふ人の子よ

聲調しらべひく手も凍りはて

なに門かどづけの身の果ぞ

やさしや年もうら若く

まだ初戀のまじりなく

手に手をとりて行く人よ

なにを隠るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて

霜と霜との枯草の

道なき道をふみわけて

きたれば寒し冬の海

朝は海邊うみべの石への上に

こしうちかけてふるさとの

都のかたを望めども

おとなふものは濤なみばかり

暮はさみしき荒磯あらいその

潮うしほを染めし砂に伏し

日の入るかたをながむれど
湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の

岩に碎けて散れるとき

かなしいかなや冬の日の

潮うしほとともに歸るとき

誰か波路を望み見て

そのふるさとを慕はざる

誰か潮の行くを見て

この人の世を惜まざる

暦こよみもあらぬ荒磯の

砂路にひとりさまよへば

みぞれまじりの雨雲の

落ちて汐うしほとなりにけり

遠く湧きくる海おとの音

慣れてさみしき吾耳に

怪しやもるゝものの音ねは
まだうらわかき野路の鳥

嗚呼めづらしのしらべぞと

聲のゆくへをたづぬれば

緑の羽はねもまだ弱き

それも初音か鶯の

春きにけらし春よ春

まだ白雪の積れども

若菜の萌えて色青き

こゝちこそすれ砂の上^へに

春きにけらし春よ春

うれしや風に送られて

きたるらしとや思へばか

梅が香ぞする海^べの邊に

磯邊に高き大^{おほいは}巖の

うへにのぼりてながむれば

春やきぬらむ東^{しののめ}雲の

潮^{しほ}の音^ね遠き朝ぼらけ

二つの聲

朝

たれか聞くらむ朝の聲

ねむり 眠と夢を破りいで

あや 彩なす雲にうちのりて

よろづの鳥に歌はれつ

天のかなたにあらはれて

東の空に光ありひかり

そこに時あり始ありとき はじめ

そこに道あり力ありみち ちから

そこに色あり詞ありことば

そこに聲あり命ありいのち

そこに名ありとうたひつゝ

みそらにあがり地にかけり

のこんの星ともろともに

光ひかりのうちに朝ぞ隠るゝ

暮

たれか聞くらむ暮の聲

霞の翼雲の帶

煙の衣露の袖

つかれてなやむあらそひを

闇のあなたに投げ入れて

夜の使の蝙蝠の

飛ぶ間も聲のをやみなく

こゝに影あり迷あり

こゝに夢あり眠あり

こゝに闇あり休息やすみあり

こゝに永きあり遠きあり

こゝに死しありとうたひつゝ

草木くさきにいこひ野にあゆみ

かなたに落つる日とともに

色なき闇に暮ぞ隠るゝ

松島瑞巖寺に遊びて

舟路も遠しふなぢ 瑞巖寺ずるがんじ

冬逍遙ふゆぜうえうのこゝろなく

古き扉に身をよせて

飛驒たぐみの名匠うきほりの浮彫うきぼりの

葡萄のかげにきて見れば

菩提の寺の冬の日

かたかなな
 刀悲しみの鑿愁みふ

ほられて薄き葡萄葉の

影にかくるゝきねずみ栗鼠よ

姿ばかりは隠すとも

かくすよしなしのみ鑿の香かは

うしほにひゞく磯寺の

かねにこの日の暮るゝとも

ゆふやみ夕闇かけてたゝずめば

こひしきやなぞ甚五郎

春

一 たれかおもはむ

たれかおもはむ鶯の

涙もこほる冬の日

若き命は春の夜の

花にうつろふ夢の間まと

あゝよしさらば美酒うまざけに

うたひあかささん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ

春を思へばひとしれず

からくれなるのかほばせに

流れてあつきなみだかな

あゝよしさらば花影に

うたひあかさむ春の夜を

わがみひとつもわすられて

おもひわづらふこゝろだに
春のすがたをとめくれば
たもとにほふ梅の花
あゝよしさらば琴の音に
うたひあかさむ春の夜を

二 あけぼの

く
れ
な
る
紅細くたなびける
雲とならばやあけぼのの

雲とならばや

やみを出でては光ある

空とならばやあけぼのの

空とならばや

春の光をいろど彩れる

水とならばやあけぼのの

水とならばや

鳩に履まれてやはらかき

草とならばやあけぼのの

草とならばや

三 春は來ぬ

春はきぬ

春はきぬ

初音やさしきうぐひすよ

こぞに別離わかれを告げよかし

谷間に残る白雪よ

葬りかくせ去歳こぞの冬

春はきぬ

春はきぬ

さみしくさむくことばなく
まづしくくらくひかりなく
みにくくおもくちからなく
かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ

春はきぬ

浅みどりなる新草にひぐさよ
 とほき野面のもせを畫えがけかし
 さきては紅あかき春花はるばなよ
 樹き々の梢ぎを染めよかし

春はきぬ

春はきぬ

霞よ雲よ動ゆるぎいで

氷れる空をあたくめよ

花の香かおくる春風よ

眠れる山を吹きさませ

春はきぬ

春はきぬ

春をよせくる朝あさじほ汐よ

蘆の枯かれは葉を洗ひ去れ

霞に酔へる雛鶴よ

若きあしたの空に飛べ

春はきぬ

春はきぬ

うれひの芹の根は絶えて

氷れるなみだ今いづこ
つもれる雪の消えうせて
けふの若菜と萌えよかし

四 眠れる春よ

ねむれる春ようらわかき
かたちをかくすことなかれ
たれこめてのみけふの日を
なべてのひとのすぐすまに

さめての春のすがたこそ
また夢のまの風情なれ

ねむげの春よさめよ春

さかしきひとのみざるまに

若紫の朝霞

かすみの袖をみにまとへ

はつねうれしきうぐひすの

鳥のしらべをうたへかし

ねむげの春よさめよ春

ふゆのこほりにむすぼれし
ふるきゆめぢをさめいでて
やなぎのいとのみだれがみ
うめのはなぐしさしそへて
びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春よさめよ春

あゆめばたにの早さわらびの
したもえいそぐな汝があしを
たかくもあげよあゆめ春
たえなるはるのいきを吹き

こそめの梅の香ににほへ

五 うてや鼓

うてや鼓の春の音

雪にうもるゝ冬の日の

かなしき夢はとぎされて

世は春の日とかはりけり

ひけばこそめの春霞

かすみの幕をひきとちて

花と花とをぬふ絲は

けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて

春をうかがふことなかれ

はなさきにほふ蔭をこそ

春の臺うてなといふべけれ

小蝶よ花にたはふれて

優しき夢をみては舞ひ

酔うて羽袖もひらくと
はるの姿をまひねかし

緑のはねのうぐひすよ

梅の花笠ぬひそへて

ゆめ静なるはるの日の

しらべを高く歌へかし

明星

浮べる雲と身をなして
あしたの空に出でざれば
などしるらめや明星の
光の色のくれなるを

朝うしほの潮と身をなして

流れて海に出でざれば

などしるらめや明星の

清^すみて哀^{かな}しききらめきを

なにかこひしき^{あかほし}暁星の

空^{むな}しき天^{あま}の戸を出でて

深くも遠きほとりより

人の世^{きた}近く來るとは

潮^{うしほ}の朝のあさみどり

水^{みなそこ}底深き白石を

星の光に透かし見て

朝の齡あさよはひを數ふべし

野の鳥ぞ啼く山河やまかはも

ゆふべの夢をさめいでて

細く棚引くしのゝめの

姿をうつす朝ぼらけ

小夜さよには小夜のしらべあり

朝には朝の音ねもあれど

星の光の絲いとの緒をに

あしたの琴は静しづかなり

まだうら若き朝の空

きらめきわたる星のうち

いちいと若き光をば

名なづけましかば明星と

潮音

わきてながるゝ

やほじほの

そこにいぎよふ

うみの琴

しらべもふかし

もゝかはの

よろづのなみを

よびあつめ

ときみちくれば

うらゝかに

とほくきこゆる

はるのしほのね

おえふ

處をとめ女へぞ經ぬるおほかたの
われは夢路ゆめぢを越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山やま河かはをながむれば

水みづ静しづかなる江戸川の

ながれの岸にうまれいで

岸の櫻はなの花影かげに

われは處女をとめとなりにけり

都みやこ鳥どり浮うく大川おほかはに

流ながれてそゝぐ川かは添ぞひの

白しろ堇すみれさく若草わかぐさに

夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重ここのへの

大宮内につかへして

清涼せいりやうでん殿の春よの夜の

月の光に照らされつ

雲を彫ちりばめ濤なみを刻ほり

霞をうかべ日をまねく

玉の臺うてなの欄おぼしま干しまに

かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の

耀かがやくさまを目にも見て

ときめきたまふさまさまの
ひとのころもの香かをかげり

きらめき初そむる 暁あかほし星の

あしたの空に動くごと

あたりの光きゆるまで

さかえの人のさまも見き

天あまつみそらを渡る日の

影かたぶけるごとくにて

名の夕暮な ゆふぐれに消えて行く
 秀ひいでし人の末路はても見き

春しづかなる御園みそのふ生の
 花に隠れて人をな哭き

秋のひかりの窓に倚り
 夕ゆふぐも雲とほき友を戀こふ

ひとりの姉をうしなひて
 大宮内の門かどを出で

けふ江戸川きに來て見れば

秋はさみしきながめかな

櫻の霜葉黄しもはきに落ちて

ゆきてかへらぬ江戸川や

流れゆく水静しづかにて

あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世を經ふれば

若いのちき命に堪へかねて

岸のほとりの草を藉しき

微笑ほゝゑみて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける あらわし 猛鷲の

人の處女をとめの身に落ちて

花の姿に宿やどかれば

風雨あらしに渴かわき雲うに饑うゑ

天翔あまかけるべき術すべをのみ

願ふ心のなかれとて

黒髪くろかみ長き吾身こそ

うまれながらの盲目めしひなれ

芙蓉ささきを前の身とすれば

涙なみだは秋の花の露

小琴をごとを前の身とすれば

愁うれひは細き糸いとの音おと

いま前の世は鷺ささきの身の

處女をとめにあまる羽翼つばさかな

あゝあるときは吾心

あらゆるものをなげうちて

世はあぢきなき浅茅生あさぢふの

茂しげれる宿やどと思ひなし

身すべは術すべもなき蟋蟀こほろぎの

夜よるの野草のぐさにはひめぐり

たゞいたづらに音ねをたてて

うたをうたふと思ふかな

色いろにわが身をあたふれば

處女をとめのこゝろ鳥となり

戀に心をあたふれば

鳥の姿は處女をとめにて

處女をとめながらも空そらの鳥

猛あらわし鷲あながら人の身の

天あめと地つちとに迷ひゐる

身の定めこそ悲しけれ

おさよ

うしお
潮さみしき 荒磯あらいその
いのかげ
巖陰われは生れけり

あしたゆふべの白駒しろこまと
ふるさと
故郷遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき

この年までの處女をとめとは

うれひは深く手もたゆく
むすぼゝれたるわが思おもひ

流れて熱あつきわがなみだ

やすむときなきわがこゝろ

亂みだれてものに狂ひよる
心を笛の音ねに吹かむ

笛をとる手は火にもえて
うちふるひけり十とをの指ゆび

音ねにこそ渴かわけ口唇くちびるの
笛を尋ふぬる風情ふせいあり

はげしく深きためいきに

笛の小竹をだけや曇るらむ

髪は亂れて落つるとも

まづ吹き入るゝいき氣息を聽け

ちから力をこめし一ふしに

黄楊つげのさしぐし櫛落ちにけり

吹けば流るゝ流るれば

笛吹き洗ふわが涙

短き笛の節ふしの間まも

長き思おもひのなからずや

七つの情聲こころを得て

音ねをこそきかめ歌うた神がみも

われ喜よろこびを吹くときは

鳥も梢ねに音をとゞめ

怒いかりをわれの吹くときは

瀬せを行く魚も淵ふちにあり

われ哀かなしみを吹くときは
獅子ししも涙をそぐらむ

われ樂たのしみを吹くときは
蟲も鳴く音ねをやめつらむ

愛あいのこゝろを吹くときは
流るゝ水のたち歸り

にくみ
 悪をわれの吹くときは
 散り行く花も止りてとゞま

よくおもひ
 慾の思を吹くときは

心の闇やみの響ひびきあり

うたへうきよ浮世の一ふしは
 笛ゆめぢの夢路のものぐるひ

くるしむなかれわがとも吾友よ
 しばしはね笛の音かへに歸れ

落つる涙をぬぐひきて
静かにきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出^いで

こゝの岸よりかの岸へ

越えましものと來^きて見れば

千鳥鳴くなり夕^{ゆふ}まぐれ

こひには親^{おや}も捨てはてて

やむよしもなき胸の火や

鬢の毛を吹く河風よ

せめてあはれと思へかし

かはなみくら
河波暗く瀬を早み

流れて巖に砕くるも

君を思へば絶間なき

戀の火炎に乾くべし

きのふの雨の小休なく

水嵩や高くまさるとも

よひよひになくわがこひの
 涙の瀧におよばじな

しりたまはずやわがこひは

花はな鳥とりの繪にあらじかし

空鏡かぐみの印象かたち砂すなの文字もじ

梢かぜの風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは

雄々をしき君の手に觸れて

嗚呼くちべ口紅をその口に

君にうつきでやむべきや

戀は吾身の社やしろにて

君は社の神なれば

君の祭壇つくゑの上ならで

なににいのちを捧ささげまし

碎くだかば碎くだけ河波かはなみよ

われに命いのちはあるものを

河波高く泳およぎ行き

ひとりの神にこがれなむ

心のみかは手も足も

吾身はすべてほのほ火炎なり

思ひ亂れて嗚呼戀の

ちすじ千筋の髪ちすじの波に流るゝ

おつた

花灰ほのみ見ゆる春の夜の

すがたに似たる吾わがいのち命

朧おぼろく々ちくはくに父母は

二つの影と消えうせて

世みなしごに孤兒の吾身こそ

影より出でし影なれや

たすけもあらぬ今は身は

わかひじり聖に救はれて

人なつかしき前まへがみ髪かみの

をこめ處女とこそはなりにけれ

わかひじり若き聖ののたまはく

時をし待たむ君ならば

かの柿みの實をとるなかれ

かくいひたまふうれしさに

ことしの秋もはや深し

まづその秋を見よやとて

聖ひじりに柿かきをすゝむれば

その口唇くちびるにふれたまひ

かくも色よき栉ならば

などかは早くわれに告げこぬ

わかひじりひじり
若き聖ののたまはく

人の命の惜をしからば

嗚呼かの酒を飲むなかれ

かくいひたまふうれしさに

酒なぐさめの一つなり

まづその春を見よやとて

ひじり
聖ひじりに酒をすゝむれば

夢の心地に酔ひたまひ

かくも樂しき酒ならば

などかは早くわれに告げこぬ

わかひじりひ
若き聖ののたまはく

道行き急いそぐ君ならば

迷ひの歌をきくなかれ

かくいひたまふうれしさに

歌も心の姿なり

まづその聲をきけやとて

一ふしうたひいでければ

聖は魂たまも酔ひたまひ

かくも樂しき歌ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若わかき聖ひじりののたまはく

まことをさぐる吾身なり

道の迷となるなかれ

かくいひたまふうれしさに

情なさけも道なの一つなり

かゝる思おもひを見よやとて

わがこの胸に指ぎせば

聖ひじりは早く戀ひわたり

かくも樂しき戀ならば

などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ

そゞろあるきのこゝろなく

ふと目に入るを手にとれば

雪ゆきより白こいしき小石なり

若わかき聖ひじりののたまはく

智ちえ惠の石とやこれぞこの

あまりに惜しき色なれば

人に隠^{かく}して今も放^{はな}たじ

おきく

くろかみながく

やはらかき

をんなごころを

たれかしる

をとこのかたる

ことのほを

まこととおもふ

ことなかれ

をとめごころの

あさくのみ

いひもつたふる

をかしさや

みだれてながき

びん
鬢の毛を

黄楊つげの小櫛をぐしに

かきあげよ

あゝ月つきぐさの

きえぬべき

こひもするとは

たがことば

こひて死なむと

よみいでし

あつきなさは

誰たがうたぞ

みちのためには

ちをながし

くには死ぬる

をとこあり

治兵衛はいづれ

戀こひか名なか

忠兵衛も名の

ために果はつ

あゝむかしより

こひ死にし

をとこのありと

しるや君

をんなごゝろは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ

お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために果^はつ

かなしからずや

清姫は

蛇へびとなれるも

こひゆゑに

やさしからずや

佐容姫は

石となれるも

こひゆゑに

をとこのこひの

たはふれは

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなかれ

をとめごよ

かなしむなかれ

わがともよ

こひするときと

かなしみと

いづれかながき

いづれみじかき

酔歌

旅と旅との君や我

君と我とのなかなれば

酔うて袂の歌うたぐさ草を

醒めての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間まに

樂しき春は老いやすし
誰が身にもてる寶ぞや

君くれなるのかほばせは

君がまなこに涙あり

君が眉には憂愁あり

堅く結べるその口に

それ聲も無きなげきあり

名もなき道を説くなかれ

名もなき旅を行くなかれ

甲斐なきことをなげくより

來りて美^{うま}き酒に泣け

光もあらぬ春の日の

獨りさみしきものぐるひ

悲しき味の世の智恵に

老いにけらしな旅人よ

心の春の燭^{ともしび}火に

若き命を照らし見よ

さくまを待たで花散らば

かな
哀しからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く

君の行衛はいづこぞや

ことはなさけ
琴花酒のあるものを

とゞまりたまへ旅人よ

哀歌

中野逍遙をいたむ

『秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴臺舊譜壚前柳、風流
銷盡二千年』、これ中野逍遙が秋怨十絶の一なり。逍遙字は
威卿、小字重太郎、豫州宇和島の人なりといふ。文科大學の
異材なりしが年僅かに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二
篇、みな紅心の餘睡にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの

清怨を寫せしもの、『寄語殘月休長嘆、我輩亦是艷生涯』、
 合せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろをとゞむ。

思君九首 中野逍遙

思君我心傷 思君我容瘁

中夜坐松蔭 露華多似淚

思君我心悄 思君我腸裂

昨夜涕淚流 今朝盡成血

示君錦字詩

寄君鴻文冊

忽覺筆端香

窻外梅花白

爲君調綺羅

爲君築金屋

中有鴛鴦圖

長春夢百祿

贈君名香篋

應記韓壽恩

休將秋扇掩

明月照眉痕

贈君雙臂環

寶玉價千金

一鐫不乖約

一題勿變心

訪君過臺下

清宵琴響搖

佇門不敢入

恐亂月前調

千里轉金鶯

春風吹綠野

忽發頭屋桃

似君三兩朶

嬌影三分月

芳花一朵梅

潭把花月秀

作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く
水になき名をしるすとして
今はた残る歌いま反古うたほごの
ながき愁うれひをいかにせむ

かなしいかなやする墨の
いろに染めてし花の木の
君がしらべの歌の音に
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前の世は
みそらにかゝる星の身の
人の命のあさぼらけ
光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に
生れいでたる身を持ちて
友の契りも結ばずに
君は早くもゆけるかな

すゞしき^{まなこ}眼つゆを帯び

葡萄のたまとまがふまで

その面影をつたへては

あまりに妬ねたき姿かな

同じ時世ときよに生れきて

同じいのちのあさぼらけ

君からくれなるの花は散り

われ命いのちあり八重やへむぐら葎

かなしいかなやうるはしく

さきそめにける花を見よ

いかなればかくとゞまらで
待たで散るらむさける間まも

かなしいかなやうるはしき

なさけもこひの花を見よ

いといと清きそのこひは

消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども

いな花よりもさらに花

君しこひとにあらねども

いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に

あまりに惜しき才ざえなれば

やまひちりかなしみ
病に塵に悲に

死しにまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの

ことばの海のみなれ棹

磯にくだくる高たか潮しほの

うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の

きづなも捨てて嘶けば

つきせぬ草に秋は来て

聲も悲しき天の馬

かなしいかなや音ねを遠み

流るゝ水の岸にさく

ひとつの花に照らされて

ひるがへ
飄り行く ひとほぶね
葉舟

秋思

秋は來きぬ

秋は來ぬ

一ひとは葉は花は露ありて

風の來て弾ひく琴の音に

青き葡萄は紫の

自然の酒とかはりけり

秋は來ぬ

秋は來ぬ

おくれさきだつ秋草も

あきぐさ

みな夕霜のおきどころ

ゆふしも

笑ひの酒を悲みの

盃にこそつぐべけれ

秋は來ぬ

秋は來ぬ

くさきも紅葉するものを

もみぢ

たれかは秋に酔はざらむ

智恵あり顔のさみしさに

君笛を吹けわれはうたはむ

初戀

まだあげ初めしそ前まへ髪がみの

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花はな櫛ぐしの

花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

うすくれなる
薄紅の秋の實みに

人こひ初そめしはじめなり

わがこゝろなきためいきの

その髪の毛にかゝるとき

たのしき戀さかづきの盃さかづきを

君なさけが情なさけに酌なさけみしかな

林檎畑の樹この下したに

おのづからなる細ほそみち道みちは

誰^たが踏^たみそめしかたみぞと
問^とひたまふこそうれしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の
人なきときに夜よるいでゝ

秋の葡萄の樹の影に

しのびてぬすむつゆのふさ

戀は狐にあらねども

君は葡萄にあらねども
人しれずこそ忍びいで
君をぬすめる吾心

髪を洗へば

髪を洗へば紫の

小草をぐさのまへに色みえて

足をあぐれば花鳥はなとりの

われに随ふ風情ふせいあり

目にながむれば彩雲あやぐもの

まきてはひらく繪卷物ゑまきもの

手にとる酒は美酒うまざけの

若き愁うれひをたゝふめり

耳をたつれば歌神うたがみの

きたりて玉たまの簫ふえを吹き

口をひらけばうたびとの

一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも

熱きこゝろのわれなれど

われをし君のこひしたふ
その涙にはおよばじな

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀こほろぎの

風にさそはれ鳴くごとく

あさかげよ はなぐさ
朝影清き花草に

を惜しき涙をそぐらむ

それかきならす玉琴の

一つの糸のさはりさへ

君がこゝろにかぎりなき

しらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは觸れやすき

君が優しき心もて

かくばかりなる吾こひに

觸れたまはぬぞ恨みなる

傘のうち

ふたり
二人してさす 一張ひとはりの

かさ
傘に姿をつゝむとも

なさけ
情の雨のふりしきり

ま
かわく間もなきたもとかな

顔と顔をうちよせて

あゆむとすればなつかしや

梅ばい花くわの油くろ黒かみ髪みの

亂かれて匂かふ傘さのうち

戀の一雨ぬれまさり

ぬれてこひしき夢まの間まや

染めてぞ燃もゆる紅も絹みうらの

雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ

しばなし情さを捨けてよかし

いづこも戀に戯^{たはぶ}れて

それ忠兵衛の夢がたり

こひしき雨よふらばふれ

秋の入日の照りそひて

傘^{かさ}の涙^ほを乾^まさぬ間に

手に手をとりにて行きて歸^{かへ}らじ

秋に隠れて

わが手に植ゑし白菊の

おのづからなる時くれば

一もと花の暮ゆふぐれ陰に

秋に隠かくれて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥あきどりの
聲にもれくる一ふしを

知るや君

深くも澄すめる朝潮あさじほの

底にかくるゝ眞しらたま珠を

知るや君

あやめもしらぬやみの夜に
静しづかにうごく星くづを

知るや君

まだ弾ひきも見ぬをとめこの
胸ねにひそめる琴の音を

知るや君

秋風の歌

さびしきはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の

西の海より吹き起り

舞ひたちさわぐ白雲しらくもの

飛びて行くへも見ゆるかな

暮影ゆふかげ高く秋は黄の

桐の梢の琴の音ねに

そのおとなひを聞くときは

風のきたると知られけり

ゆふべ西風にしかぜ吹き落ちて

あさ秋の葉の窓に入り

あさ秋風の吹きよせて

ゆふべの鶉巢かくに隠る

ふりさけ見れば青山あをやまも

色はもみぢに染めかへて

霜葉しもばをかへす秋風の

空そらの明鏡かぐみにあらはれぬ

清すしいかなや西風の

まづ秋の葉を吹けるとき

さびしいかなや秋風の

かのもみぢ葉ばにきたるとき

道を傳ふる婆羅門ばらもんの

西に東に散ちるごとく

吹き漂蕩す秋風に
飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷺鷹の
明闇天をゆくごとく

いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力あり

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふとき
悲しいかなや秋風の

秋の百葉もくはを落すとき

人は利劍つるぎを振ふるへども

げにかぞふればかぎりあり

舌は時世ときよをのゝしるも

聲はたちまち滅ほろぶめり

高くも烈はげし野も山も

息吹いぶきまどはす秋風よ

世をかれがれとなすまでは

吹きも休やむべきけはひなし

あゝうらさびしあめつち天地の

壺つぼの中うちなる秋の日や

落葉はるがへと共に飄る

風ゆくへの行衛ゆくへを誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり

秋海棠の花を分け

空ながむれば行く雲の

さらさらひみつひみつひらひら
更に祕密を聞くかな

母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の

月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに

きゞくあり

きみがはかばに

さかきあり

くさはにつゆは

しげくして

おもからずやは

そのしるし

いつかねむりを

さめいでて

いつかへりこむ

わがはゝよ

あから
紅羅ひく子も

ますらをも

みなちりひぢと

なるものを

あゝさめたまふ

ことなかれ

あゝかへりくる

ことなかれ

はるははなさき

はなちりて

きみがはかばに

かゝるとも

なつはみだるゝ

ほたるびの

きみがはかばに

とべるとも

あきはさみしき

あきさめの

きみがはかばに

そゝぐとも

ふゆはましろに

ゆきじもの

きみがはかばに

こほるとも

とほきねむりの

ゆめまくら

おそるゝなかれ

わがはゝよ

合唱

一 暗香

はるのよはひかりはかりとおもひしを

しろきやうめのさかりなるらむ

姉

わかきいのちの

をしければ

やみにも春の

香かに酔はむ

せめてこよひは

さほひめよ

はなさくかげに

うたへかし

妹

そらも急へりや

はるのよは

ほしもかくれて

みえわかず

よめにもそれと

ほのしろく

みだれてにほふ

うめのはな

姉

はるのひかりの

こひしさに

かたちをかくす

うぐひすよ

はなさへしるき

はるのよの

やみをおそるゝ

ことなかれ

妹

うめをめぐりて

ゆくみづの

やみをながるゝ

せゝらぎや

ゆめもさそはぬ

香^かなりせば

いづれかよるに

にほはまし

姉

こそこのよひは

わがともの

うすこうばいの

そめごろも

ほかげにうつる

さかづきを

こひのみゑへる

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

なみだをうつす

よのなごり

かげもかなしや

木下川に

うれひしづみし

よなりけり

姉

こそこのこよひは

わがともの

おもひははるの

よのゆめや

よをうきものに

いでたまふ

ひとめをつゝむ

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

そでのかすみの

はなむしろ

ひくやことのね

たかじほを

うつしあはせし

よなりけり

姉

わがみぎのてに

くらぶれば

やさしきなれが

たなごゝろ

ふるればいとど

やわらかに

もゆるかあつく

おもほゆる

妹

もゆるやいかに

こよひはと

とひたまふこそ

うれしけれ

しりたまはずや

うめがかに

わがうまれてし

はるのよを

二 蓮花舟

しはくもこほるゝつゆははちすはの
うきはにのみもたまりけるかな

姉

あゝはすのはな

はすのはな

かげはみえけり

いけみづに

ひとつのふねに

さをさして

うきはをわけて

こぎいでむ

妹

かぜもすゞしや

はがくれに

そこにもしろし

はすのはな

こゝにもあかき

はすばなの

みづしづかなる

いけのおも

姉

はすをやさしみ

はなをとり

そでなひたしそ

いけみづに

ひとめもはぢよ

はなかげに

なれが乳房ちぶさの

あらはるゝ

妹

ふかくもすめる

いけみづの

葉にすれてゆく

みなれぎを

なつぐもゆけば

かげみえて

はなよりはなを

わたるらし

姉

荷葉にうたひ

ふねにのり

はなつみのする

なつのゆめ

はすのはなふね

さをとめて

なにをながむる

そのすがた

妹

なみしづかなる

はなかげに

きみのかたちの

うつるかな

きみのかたちと

なつばなと

いづれうるはし

いづれやさしき

三 葡萄の樹のかげ

はるあきにおもひみたれてわきかねつ

ときにつけつゝうつるこゝろは

妹

たのしからずや

はなやかに

あきはいりひの

てらすとき

たのしからずや

ぶだうばの

はごしにくもの

かよふとき

姉

やさしからずや

むらさきの

ぶだうのふさの

かゝるとき

やさしからずや

にひぼしの

ぶだうのたまに

うつるとき

妹

かぜはしづかに

そらすみて

あきはたのしき

ゆふまぐれ

いつまでわかき

をとめごの

たのしきゆめの

われらぞや

姉

あきのぶだうの

きのかげの

いかにやさしく

ふかくとも

てにてをとりにて

かげをふむ

なれとわかれて

なにかせむ

妹

げにやかひなき

くりごとも

ぶだうにしかじ

ひとふさの

われにあたへよ

ひとふさを

そこにかゝれる

むらさきの

姉

われをしれかし

えだたかみ

とゞかじものを

かのふさは

はかげのたまに

手はふれで

わがさしぐしの

おちにけるかな

四 高樓

わかれゆくひとををしむとこよひより

とほきゆめちにわれやまとはむ

妹

とほきわかれに

たへかねて

このたかどのに

のぼるかな

かなしむなかれ

わがあねよ

たびのころもを

とゝのへよ

姉

わかれといへば

むかしより

このひとのよの

つねなるを

ながるゝみづを

ながむれば

ゆめはづかしき

なみだかな

妹

したへるひとの

もとにゆく

きみのうへこそ

たのしけれ

ふゆやまこえて

きみゆかば

なにをひかりの

わがみぞや

姉

あゝはなとりの

いろにつけ

ねにつけわれを

おもへかし

けふわかれては

いつかまた

あひみるまでの

いのちかも

妹

きみがさやけき

めのいろも

きみくれなるの

くちびるも

きみがみどりの

くろかみも

またいつかみむ

このわかれ

姉

なれがやさしき

なぐさめも

なれがたのしき

うたごゑも

なれがこゝろの

ことのねも

またいつきかむ

このわかれ

妹

きみのゆくべき

やまかはは

おつるなみだに

みえわかず

そでのしぐれの

ふゆのひに

きみにおくらむ

はなもがな

姉

そでにおほへる

うるはしき

ながかほばせを

あげよかし

ながくれなるの

かほばせに

ながるゝなみだ

われはぬぐはむ

ゆふぐれしづかに

ゆふぐれしづかに

ゆめみむとて

よのわづらひより

しばしのがる

きみよりほかには

しるものなき

花かげにゆきて

こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを

おもひみるに

こひこそつみなれ

つみこそこひ

いのりもつとめも

このつみゆゑ

たのしきそのへと

われはゆかじ

なつかしき君と

てをたづさへ

くらき冥府^{よみ}まで

かけりゆかむ

月夜

しづかにてらせる

月のひかりの

などか絶間なく

ものおもはする

さやけきそのかげ

こゑはなくとも

みるひとの胸に

忍び入るなり

なさは説くととも

なさをしらぬ

うきよのほかにも

朽ちゆくわがみ

あかさぬおもひと

この月かげと

いづれか聲なき

いづれかなしき

強敵

一つの花に蝶と蜘蛛

小蜘蛛は花を守り顔まも

小蝶は花に酔ひ顔に

舞へども舞へどもすべぞなき

花は小蜘蛛のためならば

小蝶の舞をいかにせむまひ

花は小蝶のためならば

小蜘蛛の糸をいかにせむ

やがて一つの花散りて

小蜘蛛はそこに眠れども

羽翼つばさも軽き小蝶こそ

いづこともなくうせにけれ

別離

人妻をしたへる男の山に登り其
 女の家を望み見てうたへるうた

誰かたれとどめむ旅たびびと人の

あすは雲間くもまに隠るゝを

誰か聞くらむ旅人の

あすは別れと告げましを

清きよき戀こひとや片かたし貝がひ

われのみものを思ふより

戀こひはあふれて濁にごるとも

君に涙をかけましを

人ひと妻つま戀こひふる悲かなしさを

君がなさけに知りもせば

せめてはわれを罪つみ人びとと

呼びたまふこそうれしけれ

あやめもしらぬ憂うれしや身は

くるしきこひの牢獄ひとやより
罪の鞭責しもとをのがれいで
こひて死なむと思ふなり

誰たれかは花をたづねざる
誰かは色彩いろに迷はざる
誰かは前にさける見て
花を摘つまむと思はざる

戀の花にも戯るゝ
嫉妬ねたみの蝶の身ぞつらき

二つの羽はねもをれをれて
翼つばさの色はあせにけり

人の命を春の夜の

夢といふこそうれしけれ

夢よりもいやいや深き

われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは

蓮さかばやと思ひわび

蓮の花さくころほひは

萩さかばやと思ふかな

待つまも早く秋は來きて

わが踏む道に萩さけど

濁りて待てる吾戀は

清き怨うらみとなりにけり

望郷

寺をのがれいでたる僧のうたひし

そのうた

いざさらば

これをこの世のわかれぞと

のがれいでは住みなれし

みてら御寺の藏裏くりの白壁しらかべの

眼めにもふたゝび見ゆるかな

いざさらば

住めば佛のやどりさへ

ほのほ火炎の宅いへとなるものを

なぐさめもなき心より

流れて落つる涙かな

いざさらば

心の油濁るとも

ともしびたかくかきおこし

なさはけは熱くもゆる火の

こひしき塵ちりにわれは焼けなむ

かもめ

波に生れて波に死ぬ

なさせ
情の海のかもめどり

戀の激波おほなみたちさわぎ

夢むすぶべきひまもなし

聞き潮うしほの驚きて

流れて歸るわだつみの

鳥の行衛も見えわかぬ

波にうきねのかもめどり

流星

門かどにたち出でたゞひとり

人待ち顔のさみしさに

ゆふべの空をながむれば

雲の宿りも捨てはてて

何かこひしき人の世に

流れて落つる星一つ

君と遊ばむ

君と遊ばむ夏の夜の

青葉の影の下すゞみ

短かき夢は結ばずも

せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる

晝の愁ひはたえずとも

星の光をかぞへ見よ

樂みのかず夜は盡よきじ

夢かうつゝか天の川

星に假寢の織姫の

ひゞきもすみてこひわたる

梭の遠音を聞かめやも

晝の夢

花橘の袖の香の

みめうるはしきをとめごは

まひる
眞晝に夢を見てしより

さめて忘るゝ夜のならひ

まひる
白日の夢のなぞもかく

忘れがたくはありけるものか

ゆめと知りせばなまなかに
さめざらましを世に出でて
うらわかぐさのうらわかみ
何をか夢の名残ぞと

問はば答へむ目さめては
熱き涙のかわく間もなし

四つの袖

をとこの氣息いきのやはらかき

お夏の髪にかゝるとき

をとこの早きためいきの

霰あられのごとくはしるとき

をとこの熱あつき手の掌ひらの

お夏の手にも觸るゝとき

をとこの涙ながれいで

お夏の袖にかゝるとき

をとこの黒き目のいろの

お夏の胸うつつに映るとき

をとこの紅あかき口くちびる脣の

お夏の口にもゆるるとき

人こそしらね嗚呼戀の

ふたりの身より流れいで

げにこがるれど慕へども
やむときもなき清十郎

雞

花によりそふにはとり雞の

夫つまよ妻めどり鳥よ燕子花

いづれあやめとわきがたく

さも似つかしきふぜい風情あり

姿やさしきめんどり牝雞の

かたちを恥づるこゝろして

花に隠るゝありさまに

品かはりたる夫鳥つまどりや

雄々しくたけき雄雞をんどりの

とさかの色も艶つやにして

黄なる口くちばし嘴あしけづめ脚蹴爪

尾はしだり尾のながながし

問うても見まし誰たがために

よそほひありく夫鳥つまどりよ

妻守つまもるためのかざりにと

いひたげなるぞいぢらしき

晝にこそかけれ花鳥はなとりの

それにも通ふ一つがひ

霜に侘寝の朝ぼらけ

雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の

闇行く水に動くとき

日を迎へむと雞にはとりの

夜の使を音にぞ鳴く

露けき朝の明けて行く

空のながめを誰か知る

燃ゆるがごとき紅の

雲のゆくへを誰か知る

闇もこれより隣なる

聲ふりあげて鳴くときは

人の長眠のみなめざめ

夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに
いぎ妻鳥つまどりと巢を出でて
餌ゑをあさらむと野に行けば
あなあやにくのものを見き

見しらぬとり鶏ねの音も高たかに

あしたの空に鳴き渡り

草かき分けて來くるはなぞ

妻戀つまどりふらしや妻鳥を

ねたしや露に羽はねぬれて

朝日にうつる影見れば

雄をどり雞に惜しき白妙の

雪をあざむくばかりなり

ちから
力あるらし聲たけき

かたき
敵のさまを懼れてか

いろ
聲色あるさまに羞ぢてかや

めどり
妻鳥は花に隠れけり

かくと見るより堪へかねて

背せをや高めし夫鳥つまどりは

羽がきも荒く飛び走り

蹴爪せつづめに土をかき狂ふ

筆毛ふでげのさきも逆立さかだちて

血潮ちしほにまじる眼のひかり

二つの雞とりのすがたこそ

是これおそろしき風情ふぜいなれ

妻鳥めどりは花を馳け出でて

争あらしひ鬪分あらしひくるひまもなみ

たがひに蹴合ふ蹴爪けづめには
ほのほ火焰もちるとうたがはる

蹴るや左眼さがんの的まとそれて

はね羽に血しほの夫鳥つまどりは

てき敵の右眼うがんをめざしつゝ

爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなるの

血汐の花も地に染みて

二つの雞とりの目もくるひ

たがひにひるむ風情なし

そこに聲あり涙あり

争ひ狂ふ四つの羽はね

のり血潮に滑りし夫鳥つまどりの

あな仆れけむ聲高し

一聲長く悲鳴して

あとに仆るゝ夫鳥つまどりの

羽はねは血汐あけの朱そに染み

あたりにさける花紅し

あゝあゝ熱き涙かな

あるに甲斐なき妻鳥は

せめて一聲鳴けかしと

屍かばねに嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの

いつか恐怖おそれと變りきて

思ひ亂れて音ねをのみぞ

鳴くや妻鳥めどりの心なく

我を戀ふらし音ねにたてて

姿も色もなつかしき

花のかたちと思ひきや

かなしき敵てきとならむとは

花にもつるゝ蝶あるを

鳥えにしに縁えにしのなからめや

おそろしきかな其の心

なつかしきかな其なごけの情

紅あけに染そみたる草見れば

鳥の命のもろきかな

火よりも燃ゆる戀見れば
敵のこゝろのうれしやな^{てき}

見よ動きゆく大空の

照る日も雲に薄らぎて

花に色なく風吹けば

野はさびしくも變りけり

かなしこひしの夫^{つまどり}鳥の

冷えまさりゆく其姿

たよりと思ふ一ふしの

いづれ妻鳥めどりの身の末ぞ

恐怖おそれを抱く母と子が

よりそふごとくかの敵てきに

なにとはなしに身をよする

妻鳥めどりのこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな

さきの樂しき花ちりて

空色暗く一彩毛ひとはげの

雲にかなしき野のけしき

行きてかへらぬ鳥はいざ

つま

夫か妻鳥か燕子花

めどり

いづれあやめを踏み分けて

野末を歸る二羽の雞どり

林の歌

力を刻むきざし木匠こたくみの

うちふる斧のあとを絶え

春の草花くさばなほりもの彫刻ほりものの

鑿のみにほひの韻もとゞめじな

いろさまざまの春の葉に

青一筆あをひとふでの痕あともなく

千枝ちえにわかるゝ赤樟あかくすも

おのづからなるすがたのみ

檜ひのきは荒し杉直し

五葉は黒し椎の木

枝をまじふる白樫や

樗あふちは莖をよこたへて

枝と枝とにもゆる火の

なかにやさしき若楓

山精

ひとにしられぬ

たのしみの

ふかきはやしを

たれかする

ひとにしられぬ

はるのひの

かすみのおくを

たれかする

木精

はなのむらさき

はのみどり

うらわかぐさの

のべのいと

たくみをつくす

おほはた
大機の

をさ
梭のはやしに

きたれかし

山精

かのもえいづる

くさをふみ

かのわきいづる

みづをのみ

かのあたらしき

はなにゑひ

はるのおもひの

なからずや

木精

ふるきころもを

ぬぎすてて

はるのかすみを

まとへかし

なくうぐひすの

ねにいでて

ふかきはやしに

うたへかし

あゆめば蘭の花を踏み

ゆけば楊梅袖に散り

やまもゝ

袂にまとふ山葛の

葛のうら葉をかへしては

女蘿ひかげの蔭のやまいちご

色よき實こそ落ちにけれ

岡やまつゞくまき隅々も

いとなだらかに行き延びて

ふかきはやしの谷あひに

亂れてにほふふぢばかま

谷に花さき谷にちり

人にしられず朽つるめり

せまりて暗はさまき峽より

やゝひらけたる深山木みやまぎの

春は木枝こえだのたゝずまひ

しげりて廣き熊笹の

葉末をふかくかきわけて

谷のかなたにきて見れば

いづくに行くか瀧川よ

聲もさびしや白糸の

青き巖いはほに流れ落ち

若き猿ましらのためにだに

音おとをとゞむる時ぞなき

山精

ゆふぐれかよふ

たびびとの

むねのおもひを

たれかしる

友にもあらぬ

やまかはの

はるのこゝろを

たれかしる

木精

夜^よをなきあかす

かなしみの

まくらにつたふ

なみだこそ

ふかきはやしの

たにかげの

そこにながるゝ

しづくなれ

山精

鹿はたふるゝ

たびごとに

妻こふこひに

かへるなり

のやまは枯るゝ

たびごとに

ちとせのはるに

かへるなり

木精

ふるきおちばを

やはらかき

青葉のかげに

葬れよ

ふゆのゆめぢを

さめいでて

はるのはやしに

きたれかし

今しもわたる深山みやまかぜ

春はしづかに吹きかよふ

林の簫せうの音ねをきけば

風のしらべにさそはれて

みれどもあかぬ白妙の

雲の羽袖の深山木の

千枝ちえだにかゝりたちはなれ

わかれ舞ひゆくすがたかな

樹々きぎをわたりて行く雲の

しばしと見ればあともなき

高き行衛にいぎなはれ

千々にめぐれる巖影いはかげの

花にも迷ひ石に倚り

流るゝ水の音をきけば

山は危ふく石わかれ

削りてなせる青巖あをいはに

碎けて落つる飛潭たきみづの

湧きくる波の瀬を早み

花やかにさす春の日の

光炯照りそふ水けぶりひかりて

獨り苔むす岩を攀ぢ

ふるふあゆみをふみしめて

浮べる雲をうかゞへば
下にとゞろく飛たきみづ潭の
澄むいとまなき岩波は
落ちていづくに下るらむ

山精

なにをいぎよふ

むらさきの

ふかきはやしの

はるがすみ

なにかこひしき

いはかけを

ながれていづる

いづみがは

木精

かくれてうたふ

野の山の

こゑなきこゑを

きくやきみ

つゝむにあまる
はなかげの
水のしらべを
しるやきみ

山精

あゝながれつゝ
こがれつゝ
うつりゆきつゝ
うごきつゝ

あゝめぐりつゝ
かへりつゝ
うちわらひつゝ
むせびつゝ

木精

いまひのひかり
はるがすみ
いまはなぐもり
はるのあめ

あゝあゝはなの

つゆに酔ひ

ふかきはやしに

うたへかし

ゆびをりくればいつたびも

かはれる雲をながむるに

白きは黄なりなにをかも

もつ筆にせむ色彩いろあやの

いつしか淡く茶を帯びて

雲くれなるとかはりけり

あゝゆふまぐれわれひとり

たどる林もひらけきて

いと静かなる湖の

岸邊にさける花躑躅

うき雲ゆけばかげ見えて

水に沈める春の日や

それ紅くれなゐの色染めて

雲紫となりぬれば

かげさへあかき水鳥の

春のみづうみ岸の草

深き林や花つゝじ

迷ふひとりわがみだに

ふかむらさきくれなる
深紫の紅の

あや
彩にうつろふ夕まぐれ

一葉舟より

明治三十年——同三十一年

(仙臺及び東京にて)

驚の歌

みるめの草は青くして海の潮うしほの香かににほひ

流れ藻の葉はむすぼれて蜃しんの小舟せうぶねにこがるゝも
 あしたゆふべのさだめなき大龍神おほたつがみの見る夢の
 闇くらきあらしに驚けば海原うなばらとくもかはりつゝ

とくたちかへれ夏波に友よびかはす濱千鳥

もしほやく火はきえはてて岩にひそめるかもめどり

蚕は苦やに舟は磯いそうちよする波ぎはの

削りて高き巖角いはかどにしばし身をよす二羽の鷺

いかづちの火の岩に落ち波間なみまに落ちて消ゆるまも

寝みだれ髪か黒雲くろくもの風にふかれつそらに飛び

葡萄の酒の濃紫いろこそ似たれ荒波あらのなみの

波のみだれて狂ひよるひゞきの高くすさまじや

翼つばさの骨をそばだててすがたをつゝむ若鷺の

身は覆羽おおひばやさごろもや腋羽ほろばのうちにかくせども

見よ老鷲はそこ白く赤すぢたてる大爪に
 岩をつかみて中高き頭かしら靜かにながめけり

げに白しら髪かみのものゝふの劍つるぎの霜を拂ふごと

唐から藍あゐの花ますらをのかの青あを雲くもを慕ふごと

黄葉もみぢの影に啼く鹿の谷間たにまの水に喘あへぐごと

眼鏡まなこく老鷲は雲の行くへをのぞむかな

わが若鷲はうちひそみわが老鷲はたちあがり

小河うづつに映る明星の澄めるに似たる眼まなこして

黒雲くろくもの行く大空おほぞらのかなたにむかひうめきしが

いづれこゝろのおくれたり高し烈しとさだむべき

わが若鷺は琴柱尾や胸ことぢをに文あやなす鷗しぎの斑ふの

承毛うけげは白く柔やはらか和わに谷おとの落おとし羽は飛ぶときも

湧きて流るゝ眞清水ましみづの水に翼つばさをうちひたし

このめる蔭は行く春のなごりにさける花躑躅

わが老鷺は肩剛く胸むなぼら腹はら廣く溢れいで

烈しき風をうち凌ぐ羽はねは著しるくもあらはれて

藤の花かも胸の斑ふや髀もに甲よろひをおくごとく

鳥とりの命いのちの戦いくさひに翼つばさにかゝる老の霜

げにいかめしきものゝふの盾たてにもいづれ翼をば
 張りひろげたる老鷲のふたゝびみたび羽はばたきて
 踴れる胸は海潮うみじほの湧きつ流れつ鳴るごとく
 力あふれて空高く舞ひたちあがるすがたかな

黒岩茸の岩ばなに生ふにも似るか若鷲の

いはかど

巖角ふかく身をよせて飛ぶ老鷲をうかゞふに

紋は花菱舞ひ扇ひらめきかへる疾風はやかぜの

わが老鷲を吹くさまは一葉ひとはを振ふるに似たりけり

たゝかふためにうまれては羽を劍の老鷲のはねつるぎ

うたむかたむと小休なき熱き胸より吹く氣息はいき

色くれなるの火炎かもげに悲痛の湧き上りほのほかなしみ

勁き翼をひるがへしかの天雲を凌ぎけりつよあまぐも

光を慕ふ身なれども運命かなしや老鳥のひかりさだめおいどり

一こゑ深き苦悶のおとをみそらに残しおきくるしみ

金糸の縫の黒縹子の帯かとぞ見る黒雲のきんしにくろくも

羽袖のうちにつゝまれて姿はいつか消えにけり

あゝさだめなき大空のけしきのとくもかはりゆきおほぞら

闇くらきあらしのをさまりて光にかへる海原や
 細くかゝれる彩あやくも雲はゆかりの色の濃紫
 薄紫のうつろひに楽しき園となりけらし

命を岩につなぎては細くも絲をかけとめて
 腋羽ほろばにつゝむ頭かしらをばうちもたげたる若鷲はりの
 鉤はりにも似たる爪先の雨にぬれたる岩ばなに
 かたくつきたる一つ羽ははそれも名残か老鷲はの

霜ふりかゝる老鷲はの一羽ひとはをくはへ眺むれば
 夏の光にてらされて岩根にひゞく高潮たかしほの

碎けて深き海うなばら原の岩いはかど角かどに立つ若鷺は
日影にうつる雲さして行くへもしれず飛ぶやかなたへ

白磁花瓶賦

みしやみぎはの白あやめ

はなよりしろきはながめ花瓶がめを

いかなるひとのたくみより

うまれいでしとしるやきみ

かめ瓶がめのすがたのやさしきは

根ざしも清き泉より

にほひいでたるしろたへの
こゝろのはなと君やみむ

さばかり清きたくみぞと

いひたまふこそうれしけれ
うらみわびつるわが友の
うきなみだよりいでこしを

ゆめにたはふれ夢に酔ひ

さむるときなきわが友の

名残は白き花瓶はながめに

あつきなみだの残るかな

にごりをいでてさくはなに

にほひありとなあやしみそ

光ひかりは高き花瓶はながめに

戀ねたみの嫉妬ねたみもあるものを

命運さだめをよそにかげろふの

きゆるためしぞなしといへ

あまりに薄き縁えにしこそ

友のこのよのいのちなれ

やがてさかえむゆくすゑの

ひかりも待たで夏の夜の

短かき夢は燭ともしび火の

花と散りゆきはかなさや

つゆもまだひぬみどりばの

しげきこずゑのしたかげに

ほとゝぎすなく夏のひの

もろ葉あをうめがくれの青梅も

夏の光のかゞやきて

さつきの雨のはれわたり

黄金こがねいろづく梅が枝えに

たのしきときやあるべきを

胸の青葉のうらわかみ

朝露あさつゆしげきこずゑより

落ちてくやしき青梅あをうめの

實みのひとつなる花瓶はながめよ

いのちは薄き蝉の羽の

ひとへごろものうらもなく

はじめて友の戀こひうた歌を

花はな影かげにきてうたふとき

緑のいろの夏草の

あしたの露にぬるゝごと

深くすゞしきまなこには

戀の雫のうるほひき

影うづを映してさく花の

流るゝ水を慕ふごと

なさけをふくむ口唇に

からくれなるの色を見き

をとめごゝろを眞珠しらたまの

藏くらとは友の見てしかど

寶たからの胸をひらくべき

戀の鍵かぎだになかりしか

いとけなきかなひとのよに

智恵ありがほの戀なれど

をとめごゝろのはかなきは
友の得しらぬ外なりき

あひみてのちはとこしへの
わかれとなりし世のなごり
かなしきゆめと思ひしを
われや忘れじ夏の夜半よは

月はいでけり夏の夜の
青葉の蔭にさし添ひて
あふげば胸に忍び入る

ひかりのいろのさやけさや

ゆめにゆめ見るこゝちして

ふたりの膝をうち照らす

月の光にさそはれつ

しづかに友のうたふうた

たれにかたらむ

わがこゝろ

たれにかつげむ

このおもひ

わかきいのちの
あさぼらけ

こゝろのはるの
たのしみよ

などいたましき

かなしみの

ゆめとはかはり

はてつらむ

こひはにほへる

むらさきの

さきてちりぬる

はなるを

あゝかひなしや

そのはなの

ゆかしかるべき

かをかげば

わがくれなるの

かほばせに

とゞめもあへぬ

なみだかな

くさふみわくる

こひつじよ

なれものずゑに

まよふみか

さまよひやすき

たびびとよ

なあやまりそ

ゆくみちを

龍^{たつ}を刻みし 宮^{みや}柱^{ばしら}

ふとき心はありながら

薄き命のはたとせの

名残は白き瓶^{かめ}ひとつ

たをらるべきをいのちにて

はなさくとはあらねども

朝露^{あさつゆ}おもきひとえだに

うれひをふくむ花はながめ瓶びんや

あゝあゝ清き白しらゆき雪ゆきは

つもりもあへず消ゆるごと
なつかしかりし友の身は
われをのこしてうせにけり

せめては白き花はながめ瓶びんよ

消えにしあとの野の花の
色にもいでよわが友の
いのちの春の雪の名残を

銀河

あま
天の河原を

ながむれば
星の力は
ちから

おとろへて

遠きむかしの

ゆめのあと

こゝにちとせを

すぎにけり

そらの泉いづみを

よのひとの

汲むにまかせて

わきいでし

天の河原は

かれはてて

水はいづこに

うせつらむ

ひゞきをあげよ

織姫よ

みどりの空は

かはらねど

ほしのやどりの

今ははた

いづこに梭の

音^ねをきかむ

あゝひこぼしも

織姫も

今はむなしく

老い朽くちて

夏のゆふべを

かたるべき

みそらに若き

星もなし

きりぎりす

去年こぞ蔦の葉の

かげにきて

うたひいでしに

くらぶれば

ことしも同じ

しらべもて

かはるふしなき

きりぎりす

耳なきわれを

とがめそよ

うれしきものと

おもひしを

自然しぜんのうたの

かくままでに

舊ふるきしらべと

なりけるか

同じしらべに

たへかねて

草と草との

花を分け

聲あるかたに

たちよりて

蟲のこたへを

もとめけり

花をへだてて

きみがため

聞くにまかせて

うたへども

うたのこゝろの

かよはねば

せなかあはせの

きりぎりす

春やいづこに

かすみのかげにもえいでし

糸の柳にくらぶれば

いまは小暗きこしたやみ木下闇

あゝひととき一時の

春やいづこに

色をほこりしあさみどり

わかきむかしもありけるを

今はしげれる夏の草

あゝ一時ひとときの

春やいづこに

梅も櫻もかはりはて

枝は緑みどりの酒のごと

酔うてくづるゝ夏の夢

あゝ一時ひとときの

春やいづこに

夏草より

明治三十一年

(木曾福島にて)

小兎のうた

ゆきてとらへよ

大麥の

はた
畠にかくるゝ

ことうさぎ
小兎を

われらがつくる

むぎはた
麥 畠の

青くさかりと

なるものを

たわにみのりし

穂のかげを

みだすはたれの

たはむれぞ

麥まきどりの

きなくより

丸根まるねに雨の

かゝるまで

朝露あさつゆ

しげき

星影ほしかげに

片かたさがりなき

鍬くはまくら

ゆふづゝ沈む

山のはの

こだまにひゞく

はたけうち

われらがつくる

むぎはた
麥 畠の

青くさかりと

なるものを

ゆきてとらへよ

大麥の

畠にかくるゝ

小兎を

晩春の別離

時は暮れ行く春よりぞ

また短きはなかるらむ

恨は友の別れよりうらみ

さらに長きはなかるらむ

君を送りて花近き

たかどの
高樓までもきて見れば

緑に迷ふ鶯は

かすみな

霞空しく鳴きかへり

白き光は佐保姫の

春の車駕くるまを照らすかな

これより君は行く雲と

ともに都を立ちいでて

おも
懐へば琵琶みづうみの湖の

岸の光にまよふとき

いづき
東膽吹の山高く

西には比叡比良の峯

日は行き通ふ山々の

深きながめをふしあふぎ

いかにすぐれし想をか

おもひ

沈める波に湛たぐふらむ

流れは空し法皇の

ゆめはる

夢杳かなる鴨の水

水にうつろふ山城の

みやびの都みやこ行く春の

霞めるすがた見つくして

畿内に迫る伊賀伊勢の

鈴鹿の山の波遠く

海に落つるを望むとき

いかに萬の恨よろづうらみをば

空行く鷺に窮むらむ

春去り行かば青丹よし

奈良の都に尋ね入り

としつき君がこひ慕ふ

みだう御堂のうちに遊ぶとき

古きたくみ藝術の花の香かの

伽藍がらんの壁かべに遺りなば

いかに韻にほひを身にしめて

深き思に沈むらむ

さては秋津の島が根の

南の翼紀つばさの國を

回りに進む黒潮くろしほの

鳴門に落ちて行くところ

天際あまぎは遠く白き日の

光を泄らす雲裂けて

目にはるかなる遠海の

波の踊るを望むとき

いかに胸うつ音おと高く

君が血潮のさわぐらむ

または名に負ふ歌枕

波に千とせの色映る

明石の浦のあさぼらけ

松よろづよ萬代ねの音に響く

舞子の濱のゆふまぐれ

もしそれ海の雲落ちて

淡路の島の影暗く

狭霧のうちに鳴き通ふ

千鳥の聲を聞くときは

いかに浦邊にさすらひて

遠き古を忍ぶらむ
むかし

げに君がため山々は

雲を停めむ浦々は

磯に流るゝ白波を
しらなみ

揚げむとすらむよしさらば

旅路たびぢはるかに野邊行かば

野邊のひめごと森行かば

森のひめごとさぐりもて

高きに登りあめつち天地の

もなかに遊べおほかは大川の

流れを窮めきは山々の

神をも呼ばひ谷々の

鬼をも起しおこ歌人うたびとの

魂たまをも遠く返しかへつゝ

清すしき聲をうちあげて

朽くちせぬ琴をかき鳴らせ

あゝ歌うたがみ神の吹く氣息いきは

絶えてさびしくなりにけり
ひゞき空しき天籟は
いづくにかある

九つの

藝術たくみの神のかんづまり

かんさびませしとつくにの

阿典あぜんの宮殿みやの玉垣も

今はうつろひかはりけり

草の緑はグリースの

牧場まきばを今も覆ふとも

みやびつくせしいにしへの

笛のしらべはいづくぞや

かのバビロンの水青く

千歳ちとせの色をうつすとも

柳に懸けしいにしへの

琴は空しく流れけり

げにや大雅みやびをこひ慕ふ

君にしあれば君がため

藝術たくみの天そらに懸る日も

時を導く星影も

いづれ行くへを照らしつゝ

深き光を示すらむ

さらば名残はつきずとも

袂を別つ夕まぐれ

見よ影深き欄干おぼしまに

煙をふくむ藤の花

北行く鴈はおほそら大空の

霞に沈み鳴き歸り

彩あやなす雲も愁うれひつゝ

君を送るに似たりけり

あゝいつかまた相逢うて
もとの契りをあたゝめむ

梅も櫻も散りはてて

すでに柳はふかみどり

人はあかねど行く春を

いつまでこゝにとゞむべき

われに惜むな家づとの

一枝の筆の花の色香を

うぐひす

さばれ空むなしきさへづりは

雀の群むれにまかせてよ

うたふをきくや鶯の

すぎこしかたの思ひでを

はじめて谷を出でしとき

朔きたかぜ風寒く霰さむふりあられ

うちに望みはあふるれど

行くへは雲に隠かくれてき

露は緑の羽はねを閉とぢ

霜は翅つばさの花となる

あしたに野邊の雪を嚙かみ

ゆふべに谷の水を飲む

さむさに爪も凍りはて

絶えなむとするたびごとに

また新あらたなる世にいでて
くしきいのちに歸りけり

あゝ枯かれぎく菊に枕して

冬のなげきをしらざれば
誰たが身にとめむ吹く風に
にほひ亂るゝ梅が香を

谷間たにまの笹の葉を分けて
凍れる露を飲まざれば
誰たが身にしめむ白雪の

下に萌え立つ若草を

げに春の日ののどけさは

暗くて過ぎし冬の日を

思ひ忍べる時にこそ

いや楽しくもあるべけれ

梅のこぞめの花はながさ笠を

かざしつ酔ひつうたひつゝ

さらば春風吹き來きたる

にほひ香の國に飛びて遊ばむ

かりがね

さもあらばあれうぐひすの

たくみの奥はつくさねど

または深山みやまのこまどりの

しらべのほどはうたはねど

まづかざりなき一こゑ聲に

涙をさそふ秋の雁かり

長きなげきは泄もらすとも

なほあまりあるかなしみを

うつすよしなき汝なれが身か

などかく秋を呼ぶ聲の

荒あらき響ひびをもたらしして

人の心を亂すらむ

あゝ秋の日のさみしきは

小鹿をしのしれるかぎりかは

清すしき風かぜに驚おどきて

羽袖もいとゞ冷やかにひや

百千もうちの鳥の群むれを出て

浮べる雲に慣なるゝかな

菊より落つる花びらは

汝ながついばむにまかせたり

時雨しぐれに染むるもみぢ葉ばは

汝なれがかざすにまかせたり

聲を放ちて叫ぶとも

たれかいましをとゞむべき

星はあしたに冷やかに

露はゆふべにいと白し

風に随ふ桐の葉の

枝に別れて散るごとく

天の海にうらぶれて

たちかへり鳴け秋のかりがね

野路の梅

風かぐはしく吹く日より

夏の緑のまさるまで

梢のかたに葉がくれて

人にしられぬ梅ひとつ

梢は高し手をのべて

えこそ觸れめやたゞひとり
わがものがほに朝夕あさゆふを
ながめ暮くらしてすごしてき

やがて鳴く鳥おもしろく
黄金こがねの色にそめなせば

行きかふ人の目に觸れて
落ちて履ふまるゝ野路のぢの梅

門田にいでて

遠征する人を思ひて娘の
うたへる

門^{かどた}田にいでて

草とりの

身のいとまなき

晝ひるなかば

忘るゝとには

あらねども

まぎるゝすべぞ

多かりき

夕ぐれ梭をさを

手にとりて

こゝろ静かに

織おるときは

人の得しらぬ

思ひこそ

胸より湧わきて

流れけれ

あすはいくさの

かどで
門出なり

遠きいくさの

門出なり

せめて別れの

涙をば

名残にせむと

願ふかな

君を思へば

わづらひも

照る日にとくる

朝の露

君を思へば

かなしみも

みどり
緑にそゝぐ

夏の雨

君を思へば

闇やみの夜も

光をまとふ

星の空

君を思へば

浅茅生あさぢふの

荒あれにし野邊も

花のやど

胸の思ひは

つもれども

^{ふぶき}吹雪はげしき

こひなれば

君が光に

^て照らされて

消えばやとこそ

^{うら}恨むなれ

寶はあはれ砕けけり

老いたる鍛冶のうたへる

宝はあはれたから

砕けけりくだ

さなり愛兒はまなご

うせにけり

なにをかたみと

ながめつゝ

こひしき時を

忍ぶべき

ありし昔の

香にほふ

薄^{うす}はなぞめの

帯よけむ

麗^{うる}はしかりし

黒髪の

かざしの紅^{あか}き

珠たまよけむ

帯はあれども

老おいが身に

ひきまとふべき

すべもなし

珠たまはあれども

白しら髪かみに

うちかざすべき

すべもなし

ひとりやさしき

おもかげ
面影は

まなこ
眼の底に

とゞまりて

あしたにもまた

ゆふべにも

われにともなふ

おもひあり

あゝたへがたき

くるしみに

おとろへはてつ

ほどまへ
 爐前に

たふ
 仆れかなしむ

をりをりは

面影さへぞ

力なき

われ中なかつち
 槌を

うちふるひ

ほのほの前に

はげめばや

胸にうつりし

亡き人の

語^{かた}らふごとく

見ゆるかな

あな面影の

わが胸に

活^いきて微笑^{ほくそ}む

たのしきは

やがてつとめを

いそしみて

かなしみに勝つ

いのち
生命なり

あせ
汗はこひしき

涙なり

つとめ
労働は活ける

思ひなり

いでやかひなの

折るゝまで

けふのつとめを

いそしまむ

新潮

一

我^{われ}あげまきのむかしより
潮^{うしほ}の音を聞き慣れて

磯^{いそ}邊に遊ぶあさゆふべ
海^{あま}人の舟路を慕ひしが

やがて空^{むな}しき其夢は

身の生業なりはひとなりにつけり

七月夏の海うみの香かの

海藻あまもに匂ふ夕まぐれ

兄もろともに舟ふね浮けて

力をふるふ水みなれ駟さを棹

いづれ舟出ふなではいさましく

波間に響く櫂の歌

夕潮ゆふしほ青き海うなばら原に

すなどりすべく漕ぎくれば

巻まきては開く波の上の

鴟の夢も冷やかに

浮び流るゝ海うみくさ草の

目にも幽かすかに見ゆるかな

まなこをあげて落つる日の

きらめくかたを眺むるに

羽袖うちふる鶺鴒はやぶさ隼は

彩あやなす雲を舞ひ出でて

翅つばさの塵ちりを拂ひつゝ

物にかゝはる風情ふぜいなし

飄々として鳥を吹く

風の力もなにかせむ

いきほひ

勢龍の行くごとく

は

羽音を聞けば葛城の

そつ彦むかし引きならす

まゆみ

眞弓の弦の響あり

つる

のぞみ

希望すぐれし鶺鴒よ

せめて舟路のしるべせよ

げにその高き

あらだま

荒魂は

てきおもむ しろうま
敵に赴く白馬の

たてがみ
白き鬣うちふるひ

やぶ
風を破るにまさるかな

うみづら
海面見ればかげ動く

深紫の雲の色

あまぎは
はや暮れて行く天際に

行くへや遠き鶺鴒の

は あや
もろ羽は彩にうつろひて

こがね
黄金の波にたゞよひぬ

あしづべきぎ
朝夕を刻みてし

天の柱の影暗く

雲の帳もひとたびは
とぼり

輝きかへる高御座
たかみくら

西に傾く夏の日

遠く光彩を沈めけり
ひかり

見ようるはしの夜の空
よる そら

見ようるはしの空の星

北斗の清き影返えて
きよ かげさ

望みをさそふ天の花

とはの宿りも舟ふなびと人の
光を仰ぐためしかな

潮うしほを照らす篝火かゞりびの

きらめくかたを窺へば

松まつの火あかく燃ゆれども

魚行くかげは見えわかず

流れは急はやしふなべりに

觸れてかつ鳴る夜よるの浪なみ

またくひまに風吹きて

舞たひ起つ雲をたとふれば

戦いくさに臨まむますらをの

あるは鉦かねうち貝を吹き

あるは太刀たち佩はき劍つるぎ執り

弓ゆみや矢やを持つに似たりけり

光は離れ星隠れ

みそらの花はちりうせぬ

彩あや美るしきは巻まき物ものを

高く舒のべたる大空おほそらは

みるまに暗く覆はれて

目にすさまじく變りけり

聞けばはるかに萬軍ばんぐんの

鯨波ときのひゞきにうちまぜて

陣螺ぢんらの音色ねいろほがらかに

野のの空そら高く吹けるごと

闇くらき潮うしほの音のうち

いと新あたしき聲こゑすなり

我^{われ}あまたたび海にきて

風吹き起るをりをりの

波の響に慣れしかど

かゝる清^{すゞ}しき音^ねをたてて

奇^くしき魔^まの吹く角^{かく}かとぞ

うたがはるゝは聞かざりき

こゝろせよかしはらからよ

な恐れそと叫ぶうち

あるはけはしき青^{あを}山^{やま}を

凌^{しの}ぐにまがふ波^{うへ}の上

あるは千尋ちひろの谷深く
 落つるにまがふ濤なみの影かげ

戦たひ進むものゝふの
 劍つるぎの霜を拂ふごと

溢るゝばかり奮ふるひ立ち
 潮うしほを撃ちて漕こぎくれば
 梁やなはふたりの盾たてにして
 柁かぢは鋭すき刃やいばなり

たとへば波の西にし風かぜの

梢をふるひふるごとく

舟は枯れゆく秋の葉の

枝に離れて散るごとし

ほぼしら

帆ほぼしら 檣なかば折れ碎け

かゞり

箒は海たゞよに漂ひぬ

かな

哀しくるや狂おほなみふ大波の

舟うごかすと見るうちに

櫓ろをうしなひしはらからは

げに消えやすき白露しらつゆの

落ちてはかなくなれるごと

海の藻屑もくづとかはりけり

あゝ思のみはやれども

まなこ
眼の前のおどろきは

つるぎ
劍となりて胸を刺し

ちぢ
千々に力を碎くとも

さかなみ
怒りて高き逆波は

たけ
猛き心を傷ましむ

さだめ
命運よなにの戯れぞ

たはむ
人の命は春の夜の

夢とやげにも夢ならば

いとど悲しき夢をしも

見るにやあらむ海にきて

まのあたりなるこの夢は

これを思へば胸満ちて

流るゝ涙せきあへず

今はた權をうちふりて

波と戦ふ力なく

死して仆たふるゝ人のごと

身を舟板なに投げ伏しぬ

一葉ひとはにまがふ舟の中

波にまかせて流れつゝ

聲を放ちて泣き入れば

げに底ひなきわだつみの

上に行方も定めなき

かもめ
鷗の身こそ悲しけれ

時には遠き常とこやみ闇の

光なき世に流れ落ち

朽ちて行くかと疑はれ

時には頼む人もなき

つめ
冷たき冥府よみの水底みなそこに

沈むかところそ思はるれ

あゝあやまちぬよしや身は

おろかなりともかくてわれ

もろく果つべき命かは

照る日や月や上にあり

おほたつがみ
大龍神も心あらば

い
賤しきわれをみそなはせ

かくと心に定めては

波ものかはと勵はげみたち

闇やみのかなたを窺うかがふに

空そらはさびしき雨となり

潮うしほにうつる燐りんの火の

亂れて燃ゆる影青し

我われよるべなき海うみの上へに

活いける力の胸の火を

わづかに頼む心より

消えてはもゆる闇やみの夜よの

その静かなる光こそ

漂たぐよふ身にはうれしけれ

危ふきばかりともすれば

波にゆらるゝこの舟の

行くへを照らせ燐の火よ

海よりいでて海を焚く

青きほのほの影の外

道しるべなき今の身ぞ

碎かば碎けいざさらば

波うつ權はこゝにあり

たとへ舟路は暗くとも

世に勝つ道は前にあり

あゝ新にひじほ潮にうち乗りて

命さだめ運を追うて活いきて歸らむ

落梅集より

明治三十二年——同三十三年

(小諸にて)

常盤樹

あら雄々しきかな傷ましきかな

かの常盤樹の落ちず枯れざる

常盤樹の枯れざるは

百千の草の落つるより

傷ましきかな

其枝に懸る朝の日

其幹を運めぐる夕月

など行く旅の迅速すみやかなるや

など電の影と馳するや

蝶の舞

花の笑

など遊ぶ日の世に短きや

など其酔の早く醒むるや

蟲草の葉に悲めば

ひととき
一時にして既に霜

鳥潮の音に驚けば

一時にして既に雪

木枯高く秋落ちて

自然の色はあせゆけど

だいき大力天を貫きて

坤軸遂に静息やすみなし

ものみな速くうらがれて

長き寒さも知らぬ間に

いまし汝千歳の時に嘯き

獨りし立つは何の力ぞ

白銀の花霏々として

吹雪の煙くら闇き時

四方は氷に閉されて

江海も音をひそむ時おと

汝いまし緑の蔭も朽ちせず

空を凌ぐは何の力ぞ

立てよ友なき野邊の帝王すめらぎ

ゆゝしく高く立てよ常盤樹

汝いましの長き春なくば

山の命も老いなむか

汝いましの深き息なくば

谷の響も絶えなむか

あしたには葉をうつ雲

ゆふべには枝うつ霰

千草も知らぬ冬の日の

嵐に叫ぶうきなやみ

いづれの日にか

氷は解けて

其葉の涙

消えむとすらむ

あゝよしさらば枝も摧^{くだ}けて

終の色の落ちなむ日まで

雲浮かば

無縫の天衣

風立たば

不朽の緒琴

おごそかに

立てよ常盤樹

あら雄々しきかな傷ましきかな

かの常盤樹の落ちず枯れざる

常盤樹の枯れざるは

百千もうちの草の落つるより

傷ましきかな

寂寥

岸の柳は低くして

羊の群の繪にまがひ

野薔薇の幹は埋もれて

流るゝ砂に跡もなし

たでしなやま
蓼科山の山なみの

麓をめぐる河水や

魚住む淵に沈みては

鴨の頭の深緑

花さく岩にせかれては

天の鼓の樂の音

さても水瀬はくちなはの

かうべをあげて奔るごと

白波高くわだつみに

流れて下る千曲川

あした炎をたゝかはし

ゆふべ煙をきそひてし

駿河にたてる富士の根も

今はさびしき日の影に

白く輝く墓のごと

はるかに沈む雲の外

これは信濃の空高く

今も烈しき火の柱

雨なす石を降らしては

みそらを焦す灰けぶり

神夢さめし天地の

ひらけそめにし昔より

常世につもる白雪は

今も無間の谷の底

湧きてあふるゝ紅の

血潮の池を目にみては

布引に住むはやぶさも

翼をかへす浅間山

あゝ北佐久の岡の裾

御牧が原の森の影

夢かけめぐる旅に寝て

安き一日もあらねばや

高根の上にあかあかと

燃ゆる炎をあふぐとき

み谷の底の青巖に

逆まく浪をのぞむとき

かしこにこゝに寂寥さびしきの

その味ひはにがかりき

あな寂寥さびしきや其の道は

獸の足の跡のみか

舞ひて見せたる大空の

鳥のゆくへのそれのみか

さてもためしの燈火に

若き心をうかゞへば

人の命の樹下蔭

花深く咲き花散りて

枝もたわゝの智慧の實を

味ひそめしきのふけふ

知らずばなにか旅の身に

人のなさけも薄からむ

知らずばなにか移る世に

假の契りもあだならむ

一つの石のつめたきも

萬の聲をこゝに聴き

一つの花のたのしきも

千々の涙をそこに観る

あな寂寥さびしきや吾胸の

小休をやみもなきを思ひみば

あはれの外のあはれさも

智慧のさゝやくわざぞ是

かの深草の露の朝

かの象瀉の雨の夕

またはカナンの野邊の春

またはデボンの岸の秋

世をわびびとの寢覺には

あはれ鶉の聲となり

うき旅人の宿りには

ほのかに合歡ねむの花となり

羊を友のわらべには

日となり星の數となり

夢に添ひ寢の農夫には

はつかねずみとあらはれて

あるは形にあるは音ねに

色にほひにかはるこそ

いつはり薄さびき寂寥しさをよ

いづれいましのわざならめ

さなりおもては冷やかに

いとつれなくも見ゆるより

深き心はあだし世の

人に知られぬ寂寥さびしさよ

むかしいましが雪山の

佛の夢に見えしとき

かりに姿は花も葉も

根もかぎりなき薬王樹

むかしいましが沅湘の

水のほとりにあらはれて

楚に捨てられしあてびとの

熱き涙をぬぐふとき

かりにいましは長沙羅の

鄂渚がくしよの岸に生ひいでて

ゆふべ悲しき秋風に

香けいひを送る蕙けいの草

またはいましがパトモスの

離れ小島にあらはれて

歎き仆るゝひとり身の

冷たき夢をさますとき

かりに面は照れる日や

おもて

首はゆふべの空の虹

衣はあやの雲を着て

足は二つの火の柱

黙示をかたる言の葉は

高きらつぱの天の聲

思へばむかし北のはて

舟路侘しき佐渡が島

雲に戀しき天つ日の

光も薄く雪ふれば

毘藍の風は吹き落ちて

梵おんじやう音やう聲を驚かし

岸うつ波は波羅密の

海潮音をとゞろかし

朝霜ふれば袖閉ぢて

衣は凍る鴛鴦の羽

夕霜ふれば現し身に

八つのさむさの寒古鳥

ましてや國の罪人の

安房あまの生れの梅陀羅まが子を

あな寂寥さびしさや寂寥さびしさや

ひとりいましにあらずして
天にも地にも誰かまた
そのかなしみをあはれまむ

げに晝の夢夜の夢

旅の愁にやつれては

日も暖に花深き

空のかなたを慕ふとき

なやみのとげに責められて

袖に涙のかゝるとき

汲みて味ふ寂寥さびしさの

にがき誠の一雫

秋の日遠しあしたにも

高きに登りゆふべにも

流れをつたひ獨りして

ふりさけ見れば鳥影の

天の鏡に舞ふかなた

思ひを閉す白雲の

浮べるかたを望めども

都は見えず寂寥さびしきよ

來りてわれと共にかたりね

千曲川旅情の歌

一

小諸なる古城のほとり

雲白く遊いうし子悲しむ

緑なす蘩はこべは萌えず

若草も藉くによしなし

しろがねの衾ふすまの岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に満つる香かをりも知らず

浅くのみ春は霞みて

麥の色わづかに青し

旅人の群はいくつか

畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず

歌哀し佐久の草笛

千曲川いざよふ波の

岸近き宿にのぼりつ

濁り酒濁れる飲みて

草枕しばし慰む

二

昨日またかくてありけり

今日もまたかくてありなむ

この命なにを齷齪あくせく

明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか榮枯の夢の

消え残る谷に下りて

河波のいざよふ見れば

砂まじり水巻き歸る

嗚呼古城なにをか語り

岸の波なにをか答ふ

過し世を靜かに思へ

百年もきのふのごとし

千曲川柳霞みて

春淺く水流れたり

たゞひとり岩をめぐりて

この岸に愁を繋ぐ

鼠をあはれむ

星近く戸を照せども
戸に枕して人知らず
鼠古巣を出づれども
人夢さめず驚かず

情の海の淡路島

通ふ千鳥の聲絶えて

やじりを穿つ盗人の

寢息をはかる影もなし

長き尻尾をうちふりつ

小踊りしつゝ軒づたひ

煤のみ深き梁うつぱりに

夜をうかがふ古鼠

光にいとひいとはれて

白齒もいとど冷やかに

竈の隅に忍びより

ながしに搜る鱒の骨

闇夜に物を透かし視て

暗きに遊ぶさまながら

なほ聲無きに疑ひて

影を懼れてきくと鳴き鳴く

勞働雜詠

一
朝

朝はふたゝびこゝにあり

朝はわれらと共にあり

埋れよ眠行けよ夢

隠れよさらば小夜嵐

もろは
諸羽うちふる鶏は

のんど
咽喉の笛を吹き鳴らし

けふの命の戦闘たつかひの

よそほひせよと叫ぶかな

野に出でよ野に出でよ

稲の穂は黄にみのりたり

草鞋とく結ゆへ鎌も執れ

風に嘶く馬もやれ

雲に鞭むちうつ空の日は

語らず言はず聲なきも

人を勵ます其音は

野山に谷にあふれたり

流るゝ汗と膩あぶらとの

落つるやいづこかの野邊に

名も無き賤のものゝふを

來りて護れいくさがみ軍神

野に出でよ野に出でよ

稻の穂は黄にみのりたり

草鞋とく結ゆへ鎌も執れ

風に嘶く馬もやれ

あゝ綾絹につゝまれて

爲すよしも無く寝ぬるより

薄き檻つぐれ襖はまとふとも

生きて起つこそをかしけれ

はらば匍匐ふ蟲の賤が身に

つばさ羽翼を恵むものや何

酒か涙か歎息ためいきか

迷か夢か皆なあらず

野に出でよ野に出でよ

稲の穂は黄にみのりたり

草鞋とく結ゆへ鎌も執れ

風に嘶く馬もやれ

さながら土に繋がるゝ

重き鎖を解きいでて

いとど暗きに住む鬼の

答しもとの責をいでむ時

口には朝の息を吹き
骨には若き血を纏ひ

胸に驕慢手に力

霜葉を履ふみてとく來れ

野に出でよ野に出でよ

稻の穂は黄にみのりたり

草鞋とく結ゆへ鎌も執れ

風に嘶く馬もやれ

二
晝

誰か知るべき秋の葉の

落ちて樹の根の埋むうづとき

重く聲無き石の下

清水溢れて流るとは

誰か知るべき小山田をやまだの

稻穂のたわに實るとき

花なく香なき賤しづの胸
 生命いのち踊りて響くとは

共に來て蒔き來て植ゑし

田の面もに秋の風落ちて

野邊の琥珀こはくを鳴らすかな

刈り乾せ刈り乾せ稻の穂を

血潮は草に流さねど

力うちふり鋤をうち

天の風雨あらしに雷霆いかづちに

わが鬪^{たう}ひの跡やこゝ

見よ日は高き青空の

端より端を弓として

今し父の矢母の矢の

光を降らす眞晝中

共に來て蒔き來て植ゑし

田の面^もに秋の風落ちて

野邊の琥珀^{こはく}を鳴らすかな

刈り乾せ刈り乾せ稻の穂を

左手ゆんでに稻つかを捉む時

右手めてに利鎌とがまを握る時

胸滿ちくれば火のごとく

骨と髓との燃ゆる時

土あくたと塵埃へと泥の上に

汗あぶらと膩あぶらの落つる時

緑にまじる黄の莖に

烈しき息のかゝる時

共に來て蒔き來て植ゑし

田の面もに秋の風落ちて

野邊の琥珀こはくを鳴らすかな

刈り乾せ刈り乾せ稻の穂を

思へ名も無き賤しづながら

遠きに石を荷ふ身は

夏の白ゆふだち雨過ぐるごと

ほまれ短き夢ならじ

生命いのちの長き戦たゝかひ闘は

こゝに音無し聲も無し

勝ちて桂の冠は

わづかに白き頬かぶり

共に來て蒔き來て植ゑし

田の面もに秋の風落ちて

野邊の琥珀こはくを鳴らすかな

刈り乾せ刈り乾せ稻の穂を

三 暮

揚げよ勝かちどき 閨手を延べて

稻葉を高くふりかざせ

日暮れつか 勞れて道の邊に

たふ 倒るゝ人よとく歸れ

あやぐも 彩雲や

落つる日や

行く道すから眺むれば

秋天高き夕まぐれ

共に蒔き

共に植ゑ

共に稻穂を刈り乾して

歌うて歸る今の身に

ことしの夏を

かへりみすれば

嗚呼わが魂は

たま

わなゝきふるふ

この日怖れをかの日_に傳へ

この夜望みをかの夜_に繋ぎ

門_に立ち

野邊_に行き

ある時は風高くして

青草長き谷の影

雲に嵐に稻妻に

行先も暗く聲を呑み

ある時は夏寒くして

山の鳩啼く森の下

たまたま虹に夕映に

末のみのりを祈りてき

それは逝き

これは來て

餓と涙と送りてし

同じ自然の業ながら

今は思ひのなぐさめに

光をはなつ秋の星

あゝ勇みつゝ踊りつゝ

もろて諸手をうちて笑ひつゝ

こした樹下の墓を横ぎりて

家路に通ふ森の道

眠るひじり聖もぬすびと盗賊も

皆な土くれの苔ひとへ一重

霧立つ空に入相の

精舎の鐘の響く時

あゝ驕慢とよろこび歡喜と

力を息に吹き入れて

勝ちて歸るの勢に

揚げよ樂しき秋の歌

爐邊雜興

散文にてつくれる即興詩

あら荒くれたる賤の山住や顔も黒し手も黒しすごすごと林の中を
歸る藁草履の土にまみれたるよ

こゝには五十路六十路を經つつまだ海知らぬ人々ぞ多き

炭焼の烟をながめつゝ世の移り變るも知らで谷陰にぞ住める

蒲公英たんぽぽの黄に露の花の白きを踏みつゝ慣れし其足何ぞ野獸の如き

岡のべに通ふ路には野苺の實を垂るゝあり摘みて舌うちして年を
經にけり

和布賣わかめうりの越後の女三々五々群をなして來るきた呼びて窓に倚りて海
の藻を買ふぞゆかしき

大豆を賣りて皿の上に載せたる鹽鮭の肉鹽鮭何の磯の香もなき

年々の暦と共に壁に煤けたる錦繪を見れば海ありき廣重の筆なり
 き

爺ぢやうは波を知らず婆ばあは潮の音を知らず孫は千鳥を鷄の雛かとぞ思ふ
 たまたま伊勢詣のしるしにとて送られし貝の一ひらを見れば大わ
 だつみのよろづの波を彫きざめるとぞ言ひし言の葉こそ思ひいでらる
 れ

品川の沖によるといふなる海苔の新しきは先づ棚の佛にまゐらせ
 て山家にありて遠く海草の香かをかぐとぞいふばかりなる

黄昏

つと立ちよれば垣根には

露草の花さきにけり

さまよひくれば夕雲や

これぞこひしき門邊なる

瓦の屋根に烏啼き

烏歸りて日は暮れぬ

おとづれもせず去いにもせで

螢と共にこゝをあちこち

枝うちかはす梅と梅

枝うちかはす梅と梅

梅の葉かげにそのむかし

鶏とりは鶏とりとし並び食ひ

われは君とし遊びてき

空風吹けば雲離れ

別れいざよふ西東

青葉は枝に契るとも

緑は永くとゞまらじ

水去り歸る手をのべて

誰れか流れをとゞむべき

行くにまかせよ嗚呼さらば

また相見むと願ひしか

遠く別れてかぞふれば

かさねて長き秋の夢

願ひはあれど陶磁すゑものの
くだけて時を傷いたみけり

わが髪長く生ひいでて

額の汗を覆ふとも

甲斐なく珠たまを抱きては

罪多かりし草枕

雲に浮びて立ちかへり

都の夏にきて見れば

むかしながらのみどり葉は

蔭いや深くなれるかな

わかれを思ひ逢瀬をば

君とし今やかたらふに

二人すわりし青草は

熱き涙にぬれにけり

めぐり逢ふ君やいくたび

めぐり逢ふ君やいくたび

あぢきなき夜を日にかへす

吾命暗^{やみ}の谷間も

君あれば戀のあけぼの

樹の枝に琴は懸けねど

朝風の來て彈ひくごとく

面影に君はうつりて

吾胸を靜かに渡る

雲迷ふ身のわづらひも

紅の色に微笑ほくそみ

流れつゝ冷ひゆる涙も

いと熱き思を宿す

知らざりし道の開けて

大空は今光なり

もろともにしばしたゝずみ
新しき眺めに入らむ

あゝさなり君のごとくに

あゝさなり君のごとくに

何かまた優しかるべき

歸り來てこがれ侘ぶなり

ねがはくは開けこの戸を

ひとたびは君を見棄てて

世に迷ふ羊なりきよ

あぢきなき石を枕に

思ひ知る君が牧場をまきば

樂しきはうらぶれ暮し

泉なき砂に伏す時

青草の追おもひで懷ばかり

悲しき日樂しきはなし

悲しきはふたゝび歸り

緑なす野邊を見る時

飄さまよひ泊おもひの追懷おもひばかり
樂しき日悲しきはなし

その笛を今は頼まむ

その胸むねにわれは息いきはむ

君ならで誰か飼ふべき

天地あめつちに迷ふ羊を

思より思をたどり

思より思をたどり

樹下こしたより樹下こしたをつたひ

獨りして遅く歩めば

月こよひ今夜幽かに照らす

おぼつかな春のかすみに

うち煙^{けぶ}る夜の静けさ

灰白き空の鏡は

梯の心地こそすれ

物皆はさやかならねど

鬼の住む暗にもあらず

おのづから光は落ちて

吾顔に觸^ふるぞうれしき

其光こゝに映りて

日は見えず八重^{やへ}の雲路に

其影はこゝに宿りて

君見えず遠の山川

思おもひやるおぼろおぼろの

天の戸は雲かあらぬか

草も木も眠れるなかに

仰ぎ視て涕を流す

吾戀は河邊に生ひて

吾戀は河邊に生ひて

根を浸す柳の樹なり

枝延びて緑なすまで

生命をぞ君に吸ふなる

北のかた水去り歸り

晝も夜も南を知らず

あゝわれも君にむかひて

草を藉き思を送る

吾胸の底のこゝには

吾胸の底のこゝには

言ひがたきひめごと祕密住めり

身をあげて活いけるにへ牲とは

君ならで誰かしらまし

もしやわれ鳥にありせば

君の住む窓に飛びかひ
羽を振りて晝は終日ひねもす

深き音に鳴かましものを

もしやわれ梭をぎにありせば

君が手の白きにひかれ

春の日の長き思を

その絲に織らましものを

もしやわれ草にありせば

野邊に萌もえ君に踏まれて

かつ靡きかつは微笑ほくゑみ

その足に觸れましものを

わがなげき衾に溢れ

わがうれひ枕を浸す

朝鳥に目さめぬるより

はや床は濡れてたゞよふ

くちびる

口脣に言葉ありとも

このこゝろ何か寫さむ

たゞ熱き胸より胸の

琴にこそ傳ふべきなれ

君こそは遠音に響く

君こそは遠音に響く

入相の鐘にありけれ

幽かなる聲を辿りて

われは行くめしひ盲目のごとし

君ゆゑにわれは休まず

君ゆゑにわれは仆れず
嗚呼われは君に引かれて
暗き世をわづかに搜る

たゞ知るは沈む春日の
目にうつる天のひらめき
なつかしき聲するかたに
花深き夕を思ふ

吾足は傷つき痛み

吾胸は溢れ亂れぬ

君なくば人の命に

われのみや獨ひとりならまし

あな哀かなし戀の暗には

君もまた同じ盲目めしひか

手引せよ盲目めしひの身には

盲目めしひこそうれしかりけれ

こゝろをつなぐしろかねの

こゝろをつなぐしろかね銀の

鎖も今はたえにけり

こひもまこともあすよりは

つめたき砂にそゝがまし

顔もうるほひ手もふるひ

逢うてわかれををしむより

人目の關はへだつとも

あかぬむかしぞしたはしき

形となりて添はずとも

せめては影と添はましを

たがひにおもふこゝろすら

裂きて捨つべきこの世かな

おもかげの草かゝるとも

古^ふりてやぶるゝ壁のごと

君し住まねば吾胸は

つひにくだけて荒れぬべし

一步に涙五歩に血や

すがたかたちも空の虹

おなじ照る日にたがらへて

永き別れ路見るよしもなし

罪なれば物のあはれを

罪なれば物のあはれを

こゝろなき身にも知るなり

罪なれば酒をふくみて

夢に酔ひ夢に泣くなり

罪なれば親をも捨てて

世の鞭を忍び負ふなり
罪なれば宿を逐はれて
花園に別れ行くなり

罪なれば刃に伏して

紅き血に流れ去るなり

罪なれば手に手をとりにて

死の門にかけり入るなり

罪なれば滅び碎けて

常闇とこやみの地獄のなやみ

嗚呼ふたりいだ二人抱きこがれつ

戀の火にもゆるたましひ

風よ靜かにかの岸へ

風よ靜かに彼^かの岸へ

こひしき人を吹き送れ

海を越え行く旅人の

群^{むれ}にぞ君はまじりたる

八重の汐路をかき分けて

行くは僅に舟一葉

底白しらなみ波の上なれば

君安かれと祈るかな

海とはいへどひねもすは

皐月さつきの野邊と眺め見よ

波とはいへど夜もすから

緑の草と思ひ寢よ

もし海怒り狂ひなば

われ是このきし岸に仆れ伏し

いといと深き歎息ためいきに

其嵐をぞなだむべき

樂しき初憶はじめもふ毎

哀かなしき終堪をはりへがたし

ふたゝびみたびめぐり逢ふ

天あまつ恵みはありやなしや

あゝ緑葉なげきの嘆なげきをぞ

今は海にも思ひ知る

破れて胸は紅き血の

流るゝがごと滴るがごと

椰子の實

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ

故郷ふるさとの岸を離れて
汝なれはそも波に幾いくつき月

舊もとの樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕
ひとりひとりみ身の浮寢の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば
新あらたなり流離うれひの憂

海たぎの日の沈むを見れば
激たぎり落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐しほ々々
いづれの日にか國へ歸らむ

浦島

浦島の子とぞいふなる
遊ぶべく海邊に出でて
釣すべく岩に上りて
長き日を絲垂れ暮す

流れ藻の青き葉蔭に

隠れ寄る魚かとばかり

手を延べて水を出でたる

うらわかき處女をとめのひとり

名のれ名のれ奇くしき處女をとめよ

わだつみに住める處女をとめよ

思ひきや水の中にも

黒髪の魚のありとは

かの處女をとめ嘆なげきて言へる

われはこれ潮うしほの兒なり

わだつみの神のむすめの

乙姫といふはわれなり

龍たつの宮荒れなば荒れね

捨てて來し海へは入らじ

あゝ君の胸にのみこそ

けふよりは住むべかりけれ

舟路

海にして響く艫の聲

水を撃つ音のよきかな

大空に雲は飄たぐよひ

潮分けて舟は行くなり

靜なる空に透かして

青波の深きを見れば

みなそこ
水底やはてもしられず

流れ藻の浮きつ沈みつ

緑なす草のかげより

湧き出づる泉ならねど

おのづから満ち來る汐は

海原のうちに溢れぬ

さながらに遠き白帆は

群をなすまきば牧場の羊

吹き送る風に飼はれて

わだつみの野邊を行くらむ

雲行けば舟も随ひ

舟行けば雲もまた追ふ

空と水相合ふかなた

諸共にけふの泊へとまり

鳥なき里

鳥なき里の蝙蝠や

宗助そうすけ 鋏をかたにかけ
幸助かうすけ 網を手にもちて

山へ宗助海へ幸助

黄瓜花さき夕影に

蝉鳴くかなた桑の葉の

露にすゞしき山道を

海にうらやむ幸助のゆめ

磯菜遠をちこち近砂の上に

舟干すかなた夏潮の

鯨藻に響く海の音を

山にうらやむ宗助のゆめ

かくもかはれば變る世や

幸助鋤をかたにかけ

宗助網を手にもちて

山へ宗助海へ幸助

霞にうつり霜に暮れ

たちまち過ぎぬ春と秋

のぞみは草の花のごと

砂に埋れて見るよしもなし

さながらそれもひととき一時の

胸の青雲いづこぞや

かへりみすれば跡もなき

宗助のゆめ 幸助のゆめ

ふたゝび百合はさきかへり

ふたゝび梅は青みけり

深き緑の樹の蔭を

迷うて歸る宗助 幸助

藪入

上

朝淺草を立ちいでて
かの深川を望むかな
片影すゞ冷しわれは今
こひしき家に歸るなり

籠の雀のけふ一日ひとひ

いとまたまはる藪入や

思ふまゝなる吾身こそ

空飛ぶ鳥に似たりけれ

大川端を來て見れば

帯は淺黄の染模様

うしろ姿の小走りも

うれしきわれに同じ身か

柳の並樹暗くして

墨田の岸のふかみどり

すなど
漁り舟の艫の音は

靜かに波にひゞくかな

白帆をわたる風は來て

鬢みづの井筒づいの香を拂ひ

花あつまれる浮草は

われに添ひつゝ流れけり

潮わきかへる品川の

沖のかなたに行く水や

思ひは同じかはしもの

わがなつかしの深川の宿

下

その名ばかりの鮭つけて

やがて一日は暮れにけり

いとまごひして見かへれば

蚊遣かやりに薄き母の影

あゆみは重し愁ひつゝ

岸邊を行きて吾宿の

今のありさま忍ぶにも

忍ぶにあまる宿世すくせかな

家をこゝろに浮ぶれば

夢も冷たき古簀子ふるすのこ

西日悲しき土壁つちかべの

まばら朽ちたる裏住居

南の廂傾ひさしきて

垣に短かき草箒

破れし戸に倚る夏菊の
人に昔を語り顔

風吹くあした雨の夜半

すこしは世をも知りそめて
むかしのまゝの身ならねど
かゝる思ひは今ぞ知る

身を世を思ひなげきつゝ
流れに添うてあゆめばや
今の心のさみしさに

似るものもなき眺めかな

夕日さながら晝のごとく

岸の柳にうつろひて

汐みちくれば水禽の

影ほのかなり隅田川

茶舟を下す舟人の

聲遠をちこち近に聞えけり

水をながめてたゞずめば

深川あたり迷ふ夕雲

悪夢

少年の昔よりかりそめに相知れるなにがし、獄に繋がるゝことこゝ
に三とせあまりなりしが、はからざりき飛報かれの凶音を傳へぬ。
今春獄吏に導かれて、かれを巢鴨の病床に訪ひしは、舊知相見る
の最後にてありき、かれ學あり、才あり、西の國の言葉にも通じ、
宗教の旨をも味はひ知り、おほかたの藝能にもつたなからず、人
にも侮られまじき程の品かたちは持てりしに、其半生を思ひやれ

ば實に慘苦と落魄との連鎖とも言ふべかりき。かれは春の日の長閑に暖かなる家庭に生ひたちて、希望と幸福とを一身に荷ひたりしかど、やがて獄窓に呻吟せしの日は人生流離の極みを盡したる後なりき。あはれむべし、死と狂と罪とを除きて他にかれの行くべき道とはあらざりしなり。われは今、かれが悪夢を憐むの餘り、一篇の蕪辭囚人の愁ひをとりて、みだりに花鳥の韻事を穢す、罪の受くべきはもとよりわが期する所なり。

其耳はいづこにありや

其胸はいづこにありや

激^{たぎ}り落つ愁の思

この心誰に告ぐべき

秋蠅の窓に残りて

日の影に飛びかふごとく

あぢきな^{ひとや}き牢獄のなかに

伏して寝ねまたも目さめぬ

夜^よな^{ふすま}くの衾は濡れて

吾床は乾く間も無し

黒髪は霜に衰へ

若き身は歎きに老いぬ

春やなき無間の谷間

潮やなき紅蓮の岸邊

憔悴うらがれの死灰の身には

熱き火の燃ゆる罪のみ

しろかおてな
銀の臺も碎け

戀の矢も朽ちて行く世に

いつまでか骨に刻みて

時いしらず活いくる罪かも

空の驚われに來よとや

なにかせむ自在なき身は

天の馬われに來よとや

なにかせむ鐵鎖くさりある身は

いかづちの火を吹くごとく

この痛み胸に踊れり

なかなかすみかに罪の住家は

濃き陰の暗にこそあれ

いとほしむ人なき我ぞ

隠れむにもものなき我ぞ

血に泣きて聲は吞むとも

寂^{さびし}寞^さの裾こそよけれ

世を知らぬをさなき昔

香^{いも}にほふ妹^{いも}を抱きて

すゝりなく恨みの日より

吾蟲^{たかぶ}は驕^{たかぶ}るばかり

わがいのち^{たはれうてな}戲の臺

その惡を舞ふにやあらむ

わがこゝろ悲しき鏡

その夢を見るにやあらむ

人の世に羽を撃つ風雨あらし

天あめつち地みに身は捨小舟

今更に我をうみてし

亡き母も恨めしきかな

父いかに舊もとの山河

妻いかに遠とほの村里

この道を忘れたまふや
この空を忘れたまふや

いかなれば歎きをすらむ
その父はわれを捨つるに
いかなれば忍びつ居らむ
その妻はわれを捨つるに

くろがねの窓に縋りて

ふるさと
故郷の空を望めば

浮雲や遠く懸りて

履みなれし丘にさながら

さびしさの訪ひくる外に

おとなひも絶えてなかりし

吾窓に鳴く音を聽けば

人知れず涙し流る

ひよどり

鴨よ翅を振りて

もみぢば

黄葉の陰に歌ふか

とらはれしもと

幽囚の答の責や

人の身は鳥にもしかじ

あゝ一葉^{ひとは}枝に離れて

いづくにか漂ふやらむ

照れる日の光はあれど

わがたましひは暗くさまよふ

響りんく音りんく

響りんく音りんく

うちふりうちふる鈴高く

馬は蹄をふみしめて

故郷の山を出づるとき

その黒毛たてがみなす鬣はは

冷すゞしき風に吹き亂れ

その紫の兩眼は

青雲遠く望むかな

杖の緑に袖觸れつ

あやしき鞍に跨りて

馬上に歌ふ一ふしは

げにや遊子の旅の情

あゝをさなくて國を出で

東の磯邊西の濱

さても繫がぬ舟のごと

夢長きこと二十年

たまくことし歸りきて

昔懐へばふるさとや

蔭を岡邊に尋ぬれば

しよはく

松 柏 すでに折れ碎け

みち

徑を川邊にもとむれば

野草は深く荒れにけり

菊は心を驚かし

蘭は思を傷ましむ

高きに登り草を藉き

惆悵として眺むれば

ひばら

檜原に迷ふ雲落ちて

涙流れてかぎりなし

去ねくかゝる古里はふるさと

ふたゝび言ふに足らじかし

あゝよしさらばけふよりは

日行き風吹き彩雲あやくもの

あやにたなびくかなたをも

白波高く八百潮の

湧き立ちさわぐかなたをも

かしこの岡もこの山も

いづれ心の宿とせば

しげれる谷の野葡萄に

秋のみのりはとるがまゝ

深き林の黄葉もみぢばに

秋の光は履ふむがまゝ

響りんく音りんく

うちふりうちふる鈴高く

馬は首かうべをめぐらして

雲に嘶きいさむとき

かへりみすれば古里ふるさとの

檜原ひばらは目にも見えにけるかな

翼なければ

つばさ
羽翼なければ繋がれて

朽ちはつべしとかねてしる

光なければ埋もれて

老いゆくべしとかねてしる

知る人もなき山蔭に

朽ちゆくことを厭はねば
牛飼ふ野邊の寂しさを

かくれがとこそ頼むなれ

埋^うもるゝ花もありやとて

獨り戸に倚り眺むれば

ゆふべ空^{むな}しく日は暮れて

牧場の草に春^{はるさめ}雨のふる

罪人と名にも呼ばれむ

つみびと
罪人と名にも呼ばれむ
つみびと
罪人と名にも呼ばれむ

歸らじとかねて思へば

嗚呼涙さらば故郷ふるさと

駒とめて路の樹蔭に

あまたたびかへりみすれば

輝きて立てる白壁

さやかにも見えにけるかな

たてがみ
鬣は風に吹かれて

吾駒の歩みも遅し

愁ひつゝ蹄をあげて

雲遠き都にむかふ

戦ひの世にしあなれば

野の草の露と知れれど

吾父の射る矢に立ちて

消えむとは思ひかけずよ

捨てよとや紙にもあらず

吾心焼くよしもなし

捨てよとや筆にもあらず

吾心折るよしもなし

そのねがひ親や古^ふりたる

このおもひ子や新しき

つくづくと父を思へば

吾袖は紅き血となる

やすみ
静息なく激たぎつ胸には

しがらみ

柵もなにかとゞめむ

おほみづ

洪水の溢るゝごとく

海にまで入らではやまじ

はらからやさらば故ふるさと郷

い
去ねよ去ねよ去ねよ吾駒

もろとも

諸 共に暗く寂しく

むかし

故の園を捨てて行かまし

胡蝶の夢

胡蝶の夢の人の身を

旅といふこそうれしけれ

とこよ常世に長き天あめつち地を

宿といふこそをかしけれ

青き山邊は吾枕

花さく野邊は 吾わがしとね 衾

星縫ふ空は 吾わがとぼり 帳

さかまく海は 吾わがをごと 緒琴

いづこよりとは告げがたし

いづこまでとは言ひがたし

いま日の光いま嵐

來る 歡たのしみ 樂 哀かなしみ 傷の

人のさかりをかりそめに

夏といはむもおもしろや

あゝわれひとの知らぬ間に

心の色は褪せ易し

胸うち掩ふ緑葉みどりばの

若き命もいくばくぞ

かんばせの花紅き子も

あはれや早く翁顔

あるひは高く撃てれども

翅碎けて八重葎むぐら

あるひは遠く舞へれども

望は落ちて塵埃^{あぐた}

響も聲も浮ける雲

すぐれし才はいづこぞや

涙も夢も草の雨

流れて更に音も無し

思うて誰か傷まざる

歩みて誰か迷はざる

人の命をわらはべ 兒童の

たはれ 戲と言ふは誰が言葉

賤もひじり 聖もますらを 丈夫も

わらはべ 兒童ならぬものやある

晝には晝に遊ぶべし

夜には夜に遊ぶべし

破りはつべき世ならねば

身は狂ふこそ悲しけれ

捨てつ拾ひつこの命

行きつめぐ運りつこの環たまき

落葉松の樹

落葉松からまつの樹はありとても

石南花しやくなげの花さくとても

故郷ふるさと遠き草枕

思はなにか慰まむ

旅寝は胸も病むばかり

沈む憂は酔ふがごと

獨りぬる夜の夢にのみ

たゞ夢にのみ山路を下る

ふと目はさめぬ

ふと目は覺めぬ五とせの

心の酔に驚きて

若き是このみ身をながむれば

はや吾春は老いにけり

夢の心地こゝちも甘かりし

昔は何を知れとてか

清すずしき星も身を呪ふ

今は何をか思へとや

剛かたくな 愼ななりし吾さへも

折れて泣きしは戀なりき

荒き胸にも一輪の

花をかざすは戀なりき

勇める馬の狂ひいで

たてがみ
鬣長く嘶きて

風こゝちよき青草の

野邊を蹄に履むがごと

又は眼も紫に

胸より熱き火を吹きて

汲めど盡きせぬ眞清水の

泉に喘ぎよるがごと

若き心の躍りては

軛くびきも綱も捨てけりな

こがれつ酔ひつ筆振れば

筆神ありと思ひてき

あゝうつくしき花草は

咲く間を待たで萎しぼむらむ

消きえはてにけり吾戀は

藝術諸共消たぐみえにけりもろとも

そは何故のうき世にて

人に誠はありながら

戀路の末はとこしへの
冬を生命いのちに刻きざむらむ

黒髪われを覆ふとも

血潮はわれを染むるとも

花口くちびる脣くちびるを飾るとも

思は胸いたを傷ましむ

繪筆うちふる吾指は

歎きのために震ふかな

涙に濡るゝ吾紙は

象空かたむなしく消きゆるかな

かはりはてたる吾命

かはりはてたる吾思

かはりはてたる吾戀路

かはりはてたる吾藝術たくみ

この世はあまり實みにすぎて

あたら吾身は夢ばかり

なぐさめもなきまぼろし幻の

境に泣きてさまよふわれは

縫ひかへせ

縫ひかへせ縫ひかへせ

膩あぶらに染みし其袂

涙に濡れし其袂

濯すすげよさらば嘆なげかずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ

君が衣を縫ひかへせ

^{うれひ}愁は水に汗は瀬に

濯^すげよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ

捨てよ昔の夢の垢^{あか}

やめよ甲斐なき物思

濯^すげよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ

腐れて何の袖かある

勞^{つか}れて何の道かある

濯^{すく}げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ

薄き羽袖の蟬すらも

歌うて殻を出づる世に

濯^{すく}げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ

君がなげきは古^{ふる}りたりや

とく新しき世に歸れ

濯^すげよさらば嘆^すかずもがな

青空文庫情報

底本：「藤村詩抄」岩波文庫、岩波書店

1927（昭和2）年7月10日第1刷発行

1957（昭和32）年7月5日第35刷改版発行

1991（平成3）年11月12日第75刷発行

※詩の本文は二字下げで、「鷺の歌」を除いて二段組みです。

入力：土屋隆

校正：浅原庸子

2004年5月10日作成

2016年5月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

藤村詩抄

島崎藤村自選

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 島崎藤村
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>